

經濟價値の決定に就いて

谷 田 義 一

價値論の研究は必ず限界利用學說に遡ることを必要とするが如くである。然るにこの學說に基づいて果して何處まで現實なる價値現象、惹いてはそれに基づく價格現象を説明し得るかは甚だ疑問とする所である。吾々が得る現實なる價格生活の中に經濟の本質を認めんとするとき、全く現實なる價格を離れて樹立せられたる限界利用學說の根據は或る程度まで非實際的な非難を免がれないと思ふ。その主要なる原因はこの學說が價格生活に必然的に隨伴する費用の概念を無視したる點に存するが如くである。費用は從來經濟學者が考へたるが如く必ずしも客觀的のものではない。それを主觀的に考察する場合に於て現實なる價格生活に伴ふ費用の概念が純主觀的な利用の概念と對立せられ、比較せられる可能性を有つこととなる。かくして私見によれば經濟の本質はかく主觀化せられたる利用と費用の合一化 Identifizierung von Nutzen und Kosten に認められるのである。この合一化せられる限度は一經濟主體の内面に於ける經濟性 Wirtschaftlichkeit の支配する範圍を劃するもので

ある。この經濟性に基づいて現實に生産せられ、消費せられる財の分量が定まることになる。故に利用が費用と合一する點は生産せられ、消費せられる財の分量を決定し、それに價值 Wert を成立せしめる。かくして價值は利用と費用の主觀的合一の結果、財に附せられる意義である。而して此の合一の結果成立したる價值は各欲望部門に向つて何程の所得を現實なる價格に準據して支出すべきかを決定するものである。

メンガーは「價值は人間の意識の外に存立せず」Der Wert ist ausserhalb des Bewusstseins der Menschen nicht vorhanden と言つたのであるが、C. Menges, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, Aufl. S. 108. 之れに對し最近、純

客觀價值論者として顯はれるオッペンハイマーは「主觀的な費用の感覺と價值の感覺とは取りも直さず同一なるものである。」Die subjektive Kostenempfindung und die Wertempfindung sind schlechthin identisch. F. Oppenheimer, Theorie der Reinen und Politischen Ökonomie, S. 335. 述べてゐる。この兩者は單に現實な

價格生活に立脚する價值現象の一端を眺めたものに過ぎない。利用はこれを得るために投せられる費用を決定し、費用はこれによりて得られる利用を決定し、かくて經濟の本質は兩者の主觀的合一に認められるのである。此の利用と費用の合一は既にシェフラーによりて認められてゐる。即ち彼は「經濟價值は利用と費用の數量的關係價值である」Der w. Werth

ist ein quantitativer Verhältniszwert von Nutzen und Kosten と言つてゐる。A. E. F. Schäffle, Das gesellschaftliche System

der Menschlichen Wirtschaft.
3. Aufl. S. 168.

又デイーチェルも「利用と費用の差額は異なる、利用の差額を意味するに外ならない」 Bilanz zwischen Nutzen und Kosten bedeutet nichts anders als Bilanz zwischen

verschiedenen Nutzen といつてゐる。H. Diezel, Theoretische Sozialökonomie. S. 193.

即ち彼は費用を主観化し、主観化せ

られたる費用は利用に對立する他の利用であると見たのである。最近に到つて、リーフマンも亦又等しく費用の概念を主観化して「所謂財の定限は自然に實在してゐるのではなく、それは人の内面、即ちその定限なる労働能力と労働の快感に實在してゐるものである」Die sog., „Beschränktheit der Güter liegt also nicht in der Natur, sondern sie liegt auchim Menschen in seiner beschränkten Arbeitsfähigkeit und Lust といふ。又「費用は心理的のものであり、一の不快感であり、犠牲である。」Kosten bedeutet etwas Psychisches ein unlustgefühl, Opfer. といひてゐる。Grundrisse der Volkswirtschaftslehre, II 上記シエフレー、デイーチェル、リーフマンの三者は近代に於ける利用と費用の合一に價值現象を眺めんとしたる先驅者である。

吾人はこれ等先驅者の價值理論を吟味し、それによりて主観價值學說、客觀價值學說、その他二重價值學說 Der dualistische Wertheorie 乃至は價值無用論 Der Sterbende Wertheorie を批判して見たいと思ふ。それが本文の内容をなすものである。余の價值現象を現實なる價格生活に結び付けるためには費用概念を所要することを力説する點は恩師坂田由藏氏の「價

格生活の理論により教へられる所大なるものがある。(同氏著「經濟生活の歴史的考察」中價格生活の理論參照) こゝに附記して感謝の意を表す。

一

何が經濟價值を決定し、又この經濟價值は如何なる點に於いて定まるか、は價值論上の二つの主要なる課題として古來幾多の論者の思索を煩はした所である。今、こゝに「經濟價值決定の法則に就いての一文を掲げて」論究する所もこの價值論上の二つの課題に對して所見を述べんとする企である。

吾々はこゝに品質を同じうする二つの對象に對して常に同一の價值が認められるのは何故であらうか、との疑問を掲げ、これより出發して價值論上の上記二點を明かにして見たいと思ふ。この二つの對象は必ずしも同一主體に於いて同一の欲望充足狀態に適合せられるものではない。限界利用低減の法則は一對象に他の對象が附加せられ同一欲望が充足せられる場合に於いては、第二の對象によりて充足せられる欲望の緊要度 Dringlichkeit は減せられるものであることを説明の主題としてゐるのである。かくして異なる二つの對象に對する異なる二つの欲望の充足狀態が如何にして二つの對象に同一の價值を附加するものであるか。これが主觀主義に立つ限界利用學說の叙說の目標である。尤も從來この目標は必ずしも主觀的價值理論の立場のみよ

探られてゐるのではない。主觀の外に價值の源泉を探らんとする客觀價值理論の求む目標も亦こゝに存する様である。同じ品質の二つの對象も必ずしも客觀的に見て同一なる條件の下に獲得せられるものではない。一の對象の獲得に投せられる費用と他の對象に投せられる費用とは常に必ずしも客觀的立場より測定しても同一の大きさを保つものであるとは云ひ得ない。此の客觀的條件——費用——を異にする二つの對象に如何にして同一の價值が附加せられるか。之れ客觀的價值理論も主觀價值理論と異なる立場よりこれと同一の目標を眺めんとして居る次第である。そも原始價值理論が久しき星霜を経て近代價值理論に於ける一に大進展を促すに到つた過程は主觀・客觀の兩立場より此の目標の思索のために費されるものと見るこゝが出来るのである。

今、更らにこれを文獻に就きて考證して見たいと思ふ。ボエーム・バアーズエルクは、「こゝに於いて吾々は研究の主要目標に立脚する。一つの財の價值の大きさは、かゝる種類の財の處分し得る貯藏總量によりて充足せられや欲望の内、最も低き重要度をもつ具體的欲望、即ち部分的欲望そのものゝ重要度によつて定まるものである。價值決定の標準となるものは財が創設する最大の利用でもなく、その種の財が創設し得る平均的利用でもなくして、財又はそれに類似のものが具體的經濟狀態の下にその獲得のために合理的に尙ほ充當し得る最少の利用 *kleinste Nutzen* である。若し吾々が……此の最少の利用を簡單にその財の經濟的限界利用

Der wirtschaftliche Grenznutzen と名附けるなれば財の價值の大いさの法則は、次の最も簡單な方式によりて現はすことが出来る。——一の財の價值は財の限界利用の大いさによつて定まるものである」と述べてゐる。E. Von Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins, II. Erster Band, SS. 184-185 所謂限界利用學説は上記引用文に

於いて見るが如く、一の財が充足する欲望の最終部分即ち重要度の最も少い部分より生ずる利用を捕へて價值の決定せられる一點と見るものである。此の財の總量を形づくる各部分量は各々異りたる重要度の部分的欲望に充當せられるものであるが、結局經濟價值は最終部分に於ける利用成立の一點に於いて定ることを所説の目標としてゐるのである。これと同一の傾向は主觀的利用學派と全く異なる立場を持して、客觀的價值論の新しき基礎附けをなしたるフランツ・オッペンハイマーに於いても認められるのである。彼はロビンソンの經濟狀態より出發して、

「吾々はロビンソンが一定の經濟時期間に於いて同一の財の三單位を使用するものであることを想像する。第二單位は第一單位より二倍のエネルギー費出を以て獲得せられ、第三單位は更に第二單位の二倍のエネルギー費出を以て獲得せられる。同一の人は全く同一の性質を具有する二つの目的物に就いてはたゞ同一の價值のみを置くことが出来るので、この場合凡ての單位數は同一の價值、即ち最終單位即ち限界單位の獲得が費す平均的エネルギー費出の價值を受けるものである……。」と所説してゐる。Franz-Oppenheimer Theorie der reinen und politischen Ökonomie. Vierte unveränderte Auflage. S. 336. 彼はこの各々

費用を異にする單位の價值を決定する限界單位のエネルギー費出を「限界的獲得費出」又は單に「限界的費出」 Grenz-Beschaffungsaufwand oder Grenzaufwand と名附けて居るのである。

上記の二つの異なる立場にある價值理論に於いて、その所説の目標が何れも同一點に存在することが認められる。故に價值論上の主觀主義も客觀主義も相容される多くの特質を有つに拘らず、俱に一致し調和する一點を「同一の財の價值は凡て同一なり」との命題に置いてゐるのである。私はこの價值論上の命題に價值の歸一性の名稱を附して、一主體の内面に於いてその主體を基礎として價值現象を考察する場合に於けるこの現象の終極點と見て居るのである。他面、この終極點は經濟社會一般への接觸點を保つ。かくして經濟社會は無數の評價主體の集積と考へることが出来る。主體の異なるに従つてこの主體の内面に局限せられてゐる價值現象もそれぞれ異りたる傾向を辿るものである。恰も異なる價值現象を荷ふ無數の主體の立場より、それ等を統一的に支配し得る一の價格が流通經濟社會に成立するが如く一個の主體の内面に於いて、若しくは一個の主體を基礎として、これを支配する一の價值が成立する。かくして經濟價值の歸一性は價格の歸一性と符合し、多數主體の經濟價值が相互に交しつゝするも流通經濟社會に於いて客觀化せられる一點に於いて價格がその成立の可能を保つものである。經濟社會に於ける價格の歸一性の説明が價格理論の主要なる目標であるが如く、一主體の内面に於ける

價值の歸一性は價值論の主要目標である。社會は個人を超越して考ふること能はず、この意味に於いて「社會は個人の發展である」が如く、社會的なる價格の歸一性は無數の個人主體の内に活動しつゝある價值現象の社會的所産であり、その發展である。

價值の歸一性は二種の決定を根據として達成せられるものである。一は原因決定、*Ursache-Bestimmung* 他は測度決定、*Mass-Bestimmung* である。何が經濟價值を決定するものであるかの命題は原因決定の内容をなし、この價值は如何なる點に於いて定るかの命題は測度決定の内容をなすのである。價值が原因決定に導かれて、測定決定を附加せられるとき、價值の歸一性が實現せられることとなる。主觀價值理論は欲望の充足にこの原因決定を見出し、限界利用の成立にこの測度決定を探る。かくして純主觀的見地より、換言すれば一個人主體の内面に於いて性を價值の歸一説明せんとすることがこの學說の目標である。メンガーがその主觀價值理論を創設した「國民經濟原論」*Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* を公にしたのは一八七一年であるが、その劈頭に於いて「凡ての經濟理論的研究の出發點は不足を感じる人の本性である」と述べて居るのは價值理論の原因決定が欲望充足と不可離の關係に立つものであることを一言を以て現はしたものである。この出達點よりメンガーは價值の原因決定に關し、次の結論に到達して居るのである。——「故に價值は財に固定したものでなく、財の性質でもなく況や獨立して存在

して居るものでもない。價值は經濟者がその欲望充足に於いて問題の財の處分に依存して居ることを意識することによつて具體財がこの經濟者に獲得する所の意義であり、従つて人間の意識の外には存在するものではない。……財の價值は抽象的性質のものであるに拘らず不可思議のものでもなく、況んや不明確のものでもなく、經濟財が吾々の欲望充足に對し、従つて間接に吾々の生活と幸福に對する全く實踐的にして最も正確なる考察が可能な關係であることを余は明かにしたと信ずる。』Menger, a. a. O., S. 106-9.これによりてメンガーの價值論の原因決定が純主觀的に捕捉せられ、その價值論の基礎原理をなして居ることが明かである。メンガーは此の基礎的決定より出發して經濟財の本來の測定に就いて二つの説明を與へて居るのである。一は個々の欲望充足の異りたる意義であり、彼が價值決定上の主觀的要因となすものであり、この價值測度の決定の主觀的要因に關して、彼が到達し得た所は「異りたる欲望の充足及びその充足の個々の行爲が人類に對して有する異なる意義の認識は同時に財の價值の相異の第一の原因である。』Menger, a. a. O., S. 124.」との之れである。メンガーは價值の測度決定が欲望充足の緊要度の任意の一點に於いて定ること、言はゞ價值標準 *Wertskala* に就きて述べたものである。更らに經濟價值が或る一點に於いて成立の可能を得ること、換言すれば價值現象が一個人主體の内面に於いて歸一化するためにはこれに對して或る客觀的要因が働かなければならない。メンガーは此の

客觀的要因を個々の欲望充足が具體財に依存することに求めたのである。人類の經濟的努力はその欲望を完全に、若し完全を期し難き場合に於いては出来るだけ完全に充足することに在る。一定量の財が多く、欲望に對して對立する場合に於いては、先づ最高の緊要度を有する欲望が充足せられ、殘餘を以て漸次緊要度の低下せる欲望が充足せられるものである。従つて財の一定量は充足せらるゝ欲望と充足せられざる欲望を分つ所の客觀的要因をなすものである。メンガーは一定量の財の任意の分量が如何なる價值を獲得し得るかの問題に對しこの客觀的要因を結び付けて「若し經濟人が一定量の財の分量を使用せざるときは如何なる欲望充足が失はれるものであるか」の問題に變形して居るのである。此の問題に對してメンガーは緊要度の低き欲望は等閑に附せられ、その度合の高き欲望が充足せられ、こゝに於いて上記一定量により最少の緊要度を有したるも、尙ほ確保せられたる欲望充足がその任意の分量を使用せざるこゝによつて達成せられなくなるものであるとなして居る。斯くてこの財の一定量を形づくる各部分量は、最も緊要度の低き欲望の充足に當てられる最終の部分量の欲望充足作用によりて支配せられるものである。何れか任意の部分量を失ふことは最も緊要度の低い欲望充足を失ふことを意味する。これがメンガーの價值理論に於ける價值の歸一性の論據であつて、彼が「各具體的なる場合に於いては全量により漸く確保せられる欲望充足のみが經濟者の財の量の一定の

部分量に依存してゐる。此の欲望充足は經濟者に對し欲望充足中、最も僅少なる意義を保つ。それ故に處分し得る財の量の部分量の價值はその經濟者に對しては最も僅少なる緊要度を有し、全量により漸く確保せられ且つ等しき部分量により齎される所の欲望充足が全量に對して保持する意義である」となして居るのは明かに價值の歸一性を主觀性の上に立ちて説明したものである。Menger, a. a. O., S. 127 結局、財の價值は限界利用の成立する一點に於いて定ることを明かにしたものである。

オッペンハイマーはメンガーのそれと異なる立場、即ち客觀的見地より價值の原因決定と測度決定を説明したのである。彼によれば物の客觀的利用性、例へば穀粉と肉類の營養、人造肥料の効果、石炭の熱量は使用價值であり、この利用性の度合を使用價值の高さと名附けられて居るのである。然るに物の使用價值乃至は客觀的利用性は經濟價值の原因 Ursache ではなくして一の條件 Bedingung である。原因と條件とは常に並存して居るのであるが、兩者は嚴密に區別しなければならぬ。空氣は生活の條件であるが、生活の原因ではない。整備せる軍備、高き程度の戦闘力は政治的手段による掠奪の原因ではなく、同様に手近にある食物も空腹を醫す條件であるが原因ではない。この考察によりてオッペンハイマーは「使用價值、即ち一の目的物が欲望充足に對し有用に適合するとの主觀的見解は經濟價值の條件であつて原因ではない」としたの

である。而してこの場合、此の主觀的判斷が一の所見により所信により或は知識によりて定まるかは問題ではない。欲望の保持者にして若し一の目的物が欲望充足に適合しないものであることを知れる場合に於いては、これが獲得に何等の費用 *Kosten* を投ずるものではないのである。従つて目的物に何等の價值が與へられるものではない。かくしてオッペンハイマーは欲望充足の目的物に對してその獲得の爲めに費用が投せられるや否やを以つて經濟價值が成立するか、然らざるかの原因となしたのであつて、この點はメンガーが財の欲望充足性を以つて經濟價值成立の原因となしたと全く異なる立場を取るものである。オッペンハイマーによれば欲望充足は經濟價值成立の條件であり、これを獲得するために一定の費用が投せられることが、その成立の原因となるものである。勿論、同じ費用を以つて獲得せられる二つの物の内で、一は他に比しよりよく、欲望を充足し、従つて其の欲望充足の度合に於いて相異を生ずる場合に於いては、彼はそのよりよく、欲望充足を保つ物を獲得せんとし、この場合に於いては恰も欲望の充足そのものが價值の原因の如く考へられるが、事實は然らずして、彼がその獲得のために費用を投ずること自體が價值成立の原因を決定するものである。最も大なる使用價值を有する物がそれに比して使用價值低き同種の物に投せられる費用より低き費用により獲得し得る限りは後者は經濟價值を得るものではない。この場合に於いて既に使用價值低き物に就いて客觀的にして而か

も充分分明せる利用性が認められて居るかも知れない。然し此の利用性は經濟價值の成立に對しては何等原因的作用をなすものではない。勿論、此の種の物に對して欲望の範圍が増加する場合に於いては使用價值低き物も獲得するために以前より大なる費用が投せられることとなるであらう。此の場合に於いて初めて使用價值低き物が經濟價值を獲得することとなるのである。即ち此のときに於いて費用のより高き而かも使用價值の少なる物が初めて費用手段として一定の目的に對して欲求せられ、獲得せられるに到るからである。即ちこの經濟價值の決定の過程は一方に於いて使用價值の獲得の効果が存在し、これに對して費用が投せられることによつて實現せられるものであつて、大なる費用に對して大なる効果——即ち利用性——が對立すると同様の割合に於て小なる費用に對し小なる効果が對立する場合に於いて實現せられるものである。オツペンハイマーは空氣、太陽熱の如き自由財が殊更ら大なる使用價值を有するに拘らず經濟價值を有せざるは、所謂使用價值は經濟價值の條件にして前者と後者の間には何等因果關係の存せざることによりて説明して居るのである。且つ全く利用性を有せざる呪札まじなみ若しくは、有害なる飲酒が高き經濟價值を有するは使用價值の獲得に對して一定の費用が投せられからであると見て居るのである。故に假りに使用價值と經濟價值の間に因果關係が存在するものとしたなれば、客觀の利用性を標準としてつくられる諸財のスケールは經濟價值を標準としてつくられたるスケール

イルと同じ形をとることゝなる筈である。以上が OPPENHEIMER の費用の支出を以つて、經濟價值の成立の原因となす論據の説明である。かくして彼は人類が一定の費用の手段を獲得せんとする根據 Grund²⁾、それを充當する目的 Zweck とは經濟學の考察範圍外に立つものであつて、従つて非經濟的 ausserwirtschaftlich なるものであり、純心理學的、殊に個人心理學的事實に屬するものであるが故に經濟學の領域を脱するものであるととなしてゐる。 Openheimer, a. a. O., Ss. 318—9.

以上は OPPENHEIMER の客觀價值論に現はれたる經濟價值の原因決定の説明である。此の原因決定を基礎として彼は純客觀的に經濟價值の測度決定の説明を企てゝ居る。經濟は無數の經濟行爲たる環の連鎖である。従つて同種の財に對し繰り返して謂「平均獲得價值」人類の獲得上の勞働が投せられて行くものである。こゝに於いて日常使用する財に對しては所 Durchschnittlichen Beschaffungswert が成立し、終に人は時々の獲得價值をこの平均的獲得價值と比較することを學ぶものである。而して個々の勞働費出—即ち費用支出—と平均獲得價值の相異は高き經濟の發展階段に於いては價值と價格の相異として顯著に現はれて來るものである。同一の人は同一性質の二つの目的物に對して唯、同一の價值を置くことが出來るのみであるから、目的物の凡ての單位は同様の價值を保持する事となるのである。故に此の場合に於いて凡ての單

位に附加せられる價值は一樣に最終單位の獲得に費出せられる平均的エネルギー費出によりて定まる。オッペンハイマーはこの費出を限界的獲得費出、又は限界費出 *Grenz-Beschaffungsaufwand* oder *Grenzaufwand* 名附けて居るのである。尤も一切の單位が同様の費用を以つて獲得せられる場合がある。オッペンハイマーはこの場合に於いても各單位に對して投せられた費用の支出が悉く最終單位に投せられた費用と合致する意味に於いてその限界費出を以つて經濟價值を決定する原則が等しく當條まるものであると見て居る、之れによりオッペンハイマーは純客觀的立場より、經濟價值の決定を説明せんとしメンガーが純主觀的立場より試みたるが如く等しく經濟價值の原因決定より出發して、終にその測度決定到達した譯である。

こゝに於いて價值論上の主觀主義と客觀主義の二つの立場には越ゆ可からざる間隙の存するに拘らず、又各々その所説の目標とする一點に於いて一脈相通するものの存することを看過してはならない。「何が價值を決定するか」は必然的に「價值は如何なる點に於いて決定せられるか」を伴ふものである。此の二つの決定は同じ決定の兩端に外ならない。メンガーは唯、欲望充足を標準とし、オッペンハイマーは獲得費用を基準としてこの二つの命題を明かにしたに外ならない。吾々の本文に於ける研究上の主題は「上記二つの命題に對する主觀價值論と客

觀價值論の所説の相異は果して相容れざるものであるか。若し然らざればこの二つの立場は如何に調和し、錯雜せる經濟價值理論に對して光明を投げ得るものであるか。」かに在る。

二

意識は現實の外には存在しない。現實は又意識を離れて展開するものではない。意識と現實の一致は凡ての人間生活を支配する原理である。經濟生活も亦意識を出發點とする現實の展開であり、現實より導かれる意識の作用である。經濟生活は一の價值生活であり、價值は一個人主體の内面に於ける一の感覺として現はれる。この感覺は單に主體の内面に局限せられ、孤立せる存在を保つものではなくして必ず主體の外面向つて一定の作用をなし、又この外面に於ける作用を取入れて古き意識より新しき意識が生成するものである。かくして價值生活は意識が現實に働きかけると同時に現實が又意識に反動する無數の動反動の連續としてのみ説明附けられるものである。「凡ての生活は外的關係に對する内的關係の適合である」*Alles Leben ist Anpassung innerer Relationen an äussere Relationen.*と同時に「凡ての生活は内的關係に對する外的關係の適合である」*p* *Alles Leben ist Anpassung äusseren Relationen an innere Relationen.* 價值生活としての經濟生活もこの凡ての生活に當條まる原則の支配を免がれるものではない。

意識の内面に成立する主觀價值——又は利用現象——と、その外に定る客觀價值——又は費用現象

——とは如何なる關係に立つものであるか。既にメンガーは財の全量の價值は最も緊要度の少き欲望の充足によりて定るものであるとなじ、又オッペンハイマーが經濟價值は平均的限界獲得費出によつて定るものであるとなしたのであるが、この異なる二つの立場は徹頭徹尾相容れないものであるか。吾々は先づこの疑問を抱かざるを得ないものである。

既に説明したるが如くオッペンハイマーは財の利用を以つて經濟價值の決定の一の條件とし、その原因と見ては居らないのである。今、彼の用ゐたる例を引きて吾々の抱く疑問を披瀝し、吾々の取る立場を明かにして見たいと思ふ。オッペンハイマーは間近かに食物が存在して居ると云ふことは食欲を充足する條件であるが原因ではないとなして居ることは上述の如くであるが、若しこの條件なる意味を原因と區別して考ふる場合には吾人の日常の經濟生活に於いては幾多の事物が各々此の經濟生活を圍繞して價值決定の無數の條件の存在を可能ならしめるものである。オッペンハイマーの明言せるが如く、自由財と雖ども經濟生活に對して一の條件を形づくつて居るのである。吾々が市街を散策する場合、各種の店鋪の陳列窓に飾られたる各種の商品は恰も近接せる場所に置かれたる食物の如く經濟價值の決定に對して各々條件を形づくることは吾々も亦認める所である。然しながら如何なる事情に置かれて居るに拘らず一切の物の利用性は單に經濟價值成立の條件と見ることに甚だ大なる疑問の存する所である。偶と

貧者が市街の一店頭に於いて美しきダイヤモンドを見出したる場合に於いて、彼の經濟的立場よりすればこれを獲得することはその力を越ゆる所である。此の場合吾々は貧者なる一個人主體に對して嚴密に言へば、彼の裝飾慾に對して此のダイヤモンドが對立する關係がオッペンハイマーの用ふる意味に於いては經濟價值の成立の一條件に過ぎざることを認めるに憚らない。然し、偶々富裕の貴公子が同じ店頭で同じダイヤモンドを見付け、これを獲得することは彼の力の範圍内に存するものであると前定する場合に於いては、事情は變化せざるを得ない。貴公子の裝飾慾に對する此のダイヤモンドの關係は最早や貧者の場合のそれに比することは出来ない。ダイヤモンドが貧者に對して一條件であると言ふと同じ意味に於いて、これが貴公子に對しても一條件であるを見ることは出来ないのである。幾多の條件の中で或る個人主體の經濟的立場より見て達成可能なる條件をその達成の不可能なる條件より區別して、前者を原因となし、後者を單純に條件と名附けることは何等の妨げはないのである。オッペンハイマーは屢々主觀價值、特に限界利用を批評して、それは單に經濟價值成立の條件を指示するだけの意味を有つに過ぎないものであると非難するが如くである。限界利用學說に對する彼の批評の主點は此の學說が最初より一定の財の定量を前提として、それを獲得するために如何なる費用の支出がなされたかを等閑に附して居ることである。彼に従へば費用が經濟價值の原因であり、費用の測度

が經濟價値の測度である。Oppenheimer, ^a 此の點に於いて「限界利用論者は恰も自由財に於けるが如く何等の獲得費用を必要としない場合、又は恰も僥倖に於けるが如く至當なる獲得費用を前提とせざる場合を常に考慮に容れて居るものである」とオッペンハイマーは非難してゐる。かくして彼は「限界價値のみが諸財の相對的價値を決定する場合は常にその獲得費用が考慮せられざる場合である。」となして居るのである。Oppenheimer, ^a a. a. O., S. 332. 然しながら限界利用がその成立上、一定量の財を前提として立つものであるとしても、既に此の財の一定量が欲望充足の目的物として人の意識に取入れられる場合に於いては、この財、若しくはその充用は必ずしもオッペンハイマーの認めるが如く單に經濟價値の成立の條件に過ぎざるものではなく、經濟價値決定の要因を形づくるものである。況んやオッペンハイマーが限界利用學説を捕へて、そは費用手段の獲得の動機乃至は意識的基礎を究めるものなるが故に、經濟學に屬せざるもの、彼の言葉を借りて言へば非經濟的 *ausserwirtschaftlich* であるとなし、この學説を斥けんとするは妄斷と言はなければならない。

費用が經濟價値の原因であり、費用の測度が經濟價値の測度であるとなすオッペンハイマーの見解は限界利用論者が欲望充足の緊要度を以つて經濟價値の原因となし、その測度を以つて經濟價値の測度となす見解と全く別個のものではないのである。意識の内面に於いて一定の欲

望に對し一定の緊要度が感ぜられる場合に於いては必然的に此の緊要度に伴ふべき費用の支出が一個人主體の經濟力を基準として企てられることは想像するに難くないのである。之れリーフマンに於ける利用と費用の比較が意識の内面に就いて *Proportionalitätsprinzip* を示す所以である。オッペンハイマーが一個人主體を圍繞する各種の欲望に對して限界利用學說の如く一定量の財を前提とすることなく、これに投ぜられる費用——オッペンハイマーは此の費用を獲得費用 *Beschaffungsaufwand* なる言葉で呼んで居る、これは全くその個人主體に對して客觀的な事實である——を對立せしめる場合に於いては、個人主體の異なるに從つて異なる獲得費用の最大限度が認められるのである。即ち個々の欲望に對する此獲得費用は勞働者と富者によりてその高さを異にするものである。從つてこの異なる獲得費用の下に於いては貧者と富者の獲得し得る財の範圍は自から異なるものである。これは又獲得費用を前提として經濟價值の決定を導かんとするオッペンハイマーの主張する所である。然しながら各々同量の獲得費用を前提とする二の財の獲得の範圍は何によりて、又何を基準として定まるか。それを決定するものはこの獲得費用の限度内にある欲望充足の度合でなければならないのである。此の點に鑑れば獲得する財の使用價值、利用性又はその充用はオッペンハイマーの主張するが如く必ずしも經濟價值決定の條件ではなくしてその原因であることを吾々は明かに理解することが出来るのである。

茲に於いて吾々は重要な結論に到達するのである。「利用なる感覺と費用なる感覺とはその内容を同じくするものであること」之れである。現實に大なる費用を投じて獲得せられたる財は大なる利用の感覺を招致するものである。オッペンハイマーの言葉を借りて言へば大なる主觀的充用價值 *Der Subjektive Verwendungswert* は又大なる客觀的獲得價值 *Der Objective Befriedigungswert* と一致するものである。反之、小なる費用を投じて獲得せられたる財は小なる利用の感覺に呼應するものである。メンガーが欲望の充足を以つて價值決定の原因となすのも、オッペンハイマーが客觀的獲得費用を以つて等しくその原因となすのも、吾人に於いては共に同一現象を立場を異にして考察したるものに外ならないのである。價值決定の原因が兩者に存するのではなく欲望充足に存すると見ることは獲得費用に存すると見ると同じく、獲得費用に存すると見るは欲望充足に存するとなすことを意味するに外ならない。利用と費用とは一個人主體の、内面に於ける、同一の感覺である。

同一の財を得るために投せられる費用は同一經濟主體に於ても必ずしも同一ではない。此の費用は現在貨幣經濟社會に於いては消費經濟の支出し得る貨幣額、即ち所得である。然しながら勞働も亦費用を形づくるものである。若し人が經濟的に活動することを前提とする場合に於いては最少の費用を以つて最大の利用を獲得せんことを常則とするが故に、同種の財の一定量の

獲得は得らるべき利用、即ち欲望の充足の度合が費用を超過せざる限度に於いて行はれるものである。かくして財が漸次増加せられるに従つて一面に於いて得らるゝ利用——限界利用——は低減し、之れに伴ひ費用は増加することとなる。而して此の財の獲得は利用と費用が一致する點を限度とするものである。こゝに於いてメンガーの最も緊要度の低い欲望充足の概念とオッペンハイマーの最も高き最終單位を得る限界の獲得費出の概念とは共に一致するものである。これが一致せざる様式に於ける人の財の獲得行爲は經濟的觀念に一致しないものとなる。欲望充足の限界は費用支出の限界に歸着し、費用の感覺は一個人主體の内面に於いてその財の利用の感覺を成立せしめるものである。

尤も現在の經濟社會に於いては同一の財に對しては同一の價格が成立するものであり、少くとも此の傾向が支配するものである。従つて交換の存せざる孤立經濟に於いて人の勞働が主として費用として支出せられたる場合と異り同一の財に對しては同一額の所得の部分が支出せられるものである。故に或る種の財を漸次増加して獲得する場合に於いてこれ等の財は悉く同一の費用の支出を以つて獲得せられるものであつて、オッペンハイマーの所謂限界の費用の概念は數量的表示としてはその存在の意義が認められないのである。唯、各財の獲得に費出せられる同一所得ものの部分經濟主體の内面に於いては費用の漸増として感受せられ、彼の限界費用の

概念は一の感覺として成立の可能を有つものである。然るに他面に於いて獲得する財の増加は欲望充足の低減を意味し、従つて利用は漸次低下して成立するものである。然るにこの利用が成立する一點に於いて凡ての財が同一の費用の支出を以つて獲得せられるものであるが故に、オッペンハイマーの言へる「此の場合に於ける各單位に對する費用の支出は最終單位に對する費用の支出と同じものである」^{Oppenheimer, a. a. O., S. 336.} にとゝなるも、限界に立つ欲望充足、即ち限界利用と限界費用とは感覺に於いて一致することゝなる。

今、或る財の量を漸次増加して個々の財より得られる利用は漸次低減し、一〇、九、八、七、六……の如くなるとし、反之、これに投せられる費用は漸増して四、五、六、七、八……の如くなるとする。最初の一財の利用は一〇であるが出来る限り大なる利用を小なる費用を以つて獲得せんとする人の經濟性は最も低き費用四によりて此の財を獲得することを導くものである。然るに第二の財の利用は九にしてその費用も次に高き五に結合せられることが經濟性の常則に適合するものである。かくして第三財は八の利用と六の費用、第四財は七の利用と七の費用が結合することになるのである。然るに第五財はその利用六にして、その費用は八なるが故に費用は既に利用を超過し、此の財を獲得することは人に取りて經濟上の不利益を生づるものである。故に經濟者は四個の財を獲得し、その量をこれ以上に増加しないのである。限界に立つ財

の七の利用の内容は等しく七の費用を投ずることによりて與へられるものである。第四財を失ふことは七の利用を失ふことを意味するのであるが、同時に七の費用を節約することを意味するものである。又第四財を得ることは七の利用を得ることを意味するのであるが又等しく七の費用を投ずることを意味するものである。七の費用を投ずることは六の利用を得ることを前提として行はれ、七の利用を得ることは七の費用を投ずることを前提として達成せられたのである。斯くして費用の感覺は一個人主體の内面に於いて利用の決定の唯一の原因であり、費用の感覺の測度は利用測度の決定の唯一の原因であり、同時に低減する欲望充足の緊要度即ち利用は費用決定の唯一の原因であり、欲望充足の緊要度の測度即ち利用は費用測度決定の唯一の原因である。價值理論上の主觀主義も客觀主義も共にこの利用と費用の一致を等閑に附したのであつて、兩者は必ずしも相容れざるものではなく、結局その根本に於いて同一の事實を異りたる立場より説明せんとするに外ならないのである。

吾々が利用と費用とは同一の主體の内面に於いて同じ内容をなす——利用と費用の合一化 *Identifikation von Nutzen und Kosten*——の立場を維持する場合に於いては、ボエーム・バーヴェンクは主觀價值理論の出發點である利用性 *Nützlichkeit* 又は有用なる原因 *Eine taugliche ursache*

の見地を離れて財が人の厚生に對する「不可缺の要件」Die entbehrliche Bedingungen; conditio sine qua non を創設したるに拘らず、未だ價值決定の基礎の全部を盡さざることに想到するのである。厚生に對する不可缺の要件とは一の財の所有によりて生活の快樂の有無が決定せられることを意味するものである。故に單に利用性を有する財に對しては經濟者は無關心にして無差別である。凡ての財は利用性を有して居るが價值を有つものではない。此の利用性とは單に財が人間の厚生に役立つ能力に外ならないのである。かくしてボエームは價值の定義を此の不可缺の厚生要件に結び附けて、「價值とは一財若しくは財の集合が一主體の厚生の目的に對して有する意義である」となして居るのである。 Böhm-Bawerk, a. a. O., S. 167

財が人に對して有する厚生の不可缺要件は所謂「稀少性」Seltenheitの原理に立つものである。ボエームが價值決定に當つて屢々財の數量關係 Quantitätsverhältnissen der Güterと言ひ、或は欲望と充足關係 Das Verhältnis von Bedarf und Deckungと言ひ、或は財の利用性と稀少性の關係 Das Verhältnis von Nützlichkeit und Seltenheit der Güterと言つてゐるのは、此の稀少性の原理に基づいた財の人の厚生に對する不可缺要件を指示するものである。かくして此の財の不可缺要件は價值を有すべき財と然らざる財とを區別する標準をなすものである。財は欲望の充足に對してその使用せられる總量がこれ以上増加しなければ不足であるか、又は漸く足りる程度の僅

少さを保つ場合に於いては、價值を有つものである。然るに財の總量が欲望を全く充足し得るのみならず、餘剰を生じ、その餘剰は最早や充用せられざるのみならず、それは評價に取入れられたる財、若しくは財の分量を失ふも未だ欲望の充足には差支なき程豊富なる場合に於いては、その價值は失はれるものである。財が價值を有するや否やは、それが稀少性原理に基づく人の厚生、の不可缺要件に區別の基準が求められるのであつて、ボエームは此の點より財の價值を考察し、その他の決定要因を除斥せんとして居るのである。此の點に於てボエームの價值理論は終始、一面的の觀察に囚はれて居るのである。ボエームが一定の財が單純に利用し得るに過ぎないのであるか、又は吾人に對して利用の要件となるものであるかを決定するものは唯、數量的關係であると述べて居る點は、明かに價值の決定に對して費用の觀念を等閑に附し、否、自らこれを斥けんとしたのであつて、彼の價值理論の全流を不完全に導く根據はこゝに横はつて居る様に思はれる。

財をそれ自體の性能に局限して、人の厚生に對する不可缺要件を形づくるか否かの基準をその數量的關係のみに求めたるボエームの立場に對して、シャーリングはこれと全く異なる立場を保持して居るのである。彼によれば使用價值を決定する主要なる要因は獲得の困難 *Difficulty*

Schwierigkeit der Erlangung である。先づ彼は財の使用價值をその使用性 Brauchbarkeit より區別したのである。使用性とは財が何等かの人の願望、即ち欲望を充足することを指示するものであつたり、これに對して使用價值はこれを所有する主體即ち所有者に着眼して定る概念である。即ち、彼は使用價值を定義して、一財の所有者がその個人の關係に基づき財よりなし得る使用に着目して此の財に置く價值となして居るのである。即ち使用性は財の性能に關係して、その意味が定められて居るのであるが、使用價值は財の所有者の立場よりその意味が定められて居るのである。かくて發掘の着手せられない炭坑の石炭、經營せられざる鑛山の鐵も使用性を有する目的物であるが、使用價值を有つものではない。シャーリングによれば、此の使用性と使用價值の大なる相異の存在するに到る理由は、使用價值決定の二つの要因、即ち一は欲望の性質即ち充用 Anwendung、他は欲望充足を惹起す困難の多少、即ち獲得の困難 Schwierigkeit der Erlangung の内、後者が使用價值決定に著しき影響を與へるとなす立場に基づくものである。即ちこの後者の要因が著しい影響を保持するために財の使用性には何等變動なきに拘らず、その使用價值は著しく變動することゝなるのである。例へば金に對しては銀よりも、銀に對しては鐵よりも大なる使用價值が與へられるのであるが、これは各々その使用性の度合に基づくものではなくして、一封度の金若しくは銀を所有に歸せしめることは一封度の鐵を所有に歸せし

めるより困難であるからである。かくして若し財の使用價值に對して欲望の性質が決定的のものであるとすれば、恐らく最も緊要なる欲望を充す對象が無條件に最も大なる使用價值を有つこととなるべき筈である。かくして水や麵麩は他の物に比してより大なる使用價值を有つ筈である。事實非常なる場合、例へば包圍せられた都市に於いてはこのことが起るのである。然しながら此の場合に於いて一定の時に於いて財に與へられたる使用價值に對して本質的影響を與へるものは此の財の所有の爲め獲得する困難である。かくしてシャーリングはボエームと異り財の數量關係を價值決定の唯一の要因となさずして獲得の困難を以つてこれに代へたのである。(以上 W. Scharling, *Conrads Jahrbüchern* 16. Bd. *Werttheorien und Wertgesetz*. S. S. 422-9 參照)

シャーリングが獲得の困難を價值決定の主要々因となし、使用性と使用價值の不一致はこれに基づくものであるとなす見解乃至は他勞働費出等の客觀的等存在を以つて價值決定の基準となす見解に對して、ボエームは次の如く辯明して「これ等の見解は眞の決定の第一要因の代りに第二次的の要因を掲げて居るものである。吾々は財の貯藏量が不充分なるが故に欲望充足の不足を蒙り、且つこれを懸念する時に於いてのみ、又その理由によりてのみ獲得の困難、勞働等を敢へて試みんとするものである。この獲得の困難及勞働等は恐らく困難若しくは苦痛を感じて獲得せられる種類の財は、持續的にその存在が稀少であるとの眞の決定的事情に結合せられなければ

財の經濟的性質を維持するものではないのである」述べてゐると。かくしてポエームは假令屢その技術的關係より一財が困難の征服によりて獲得せられる場合に於いても、若し此の財が充分なる餘剰を以つて獲得せられる場合に於いては價值を生ぜないのは價值を決定するものは困難ではなくして稀少性であることを立證するものゝ如くである。例へば管によりて水を飲料として取付ける場合に於いてこれは勞働並に費用の費出を當然惹起するものであるが、若し此の水が充分餘剰の状態にある場合に於いては農夫はこの水によりて經濟することには思付かないであらう。

Bohm-Bawerk, a. a.
O., 169 Anmerkung

既述したるが如く、價值の決定は費用の感覺を伴ひ利用と費用の合一に價值の成立を認める吾人の見解に従へばシャーリングの見解もポエームの見解も共に同一物の一面を考察したるものに外ならない。既に欲望充足より主觀的に一定の價值の成立の見込の存する場合に於いてポエームの言葉を借りて言へば人の厚生に對して財の數量的關係より價值決定の不可缺の要件が確保せられる場合に於いては、これに對して一定の困難を敢へてせんとする人の *Bereitwilligkeit* の起ることは必然と言はなければならない。かくしてその財を獲得するために費された勞働費出、その他の客觀的要素が獲得したる物に對する價值の主要なる内容を形づくるに到るもので

ある。ボエームは管によりて導かれたる水に就いては人の經濟が起り得ないものであることを述べて居るのであるが、如何に結果に於いて餘剰の水が導かれるにしても一定の水を一定の勞力その他の費用を投じて飲料水に供せんとするは既に水が農夫の厚生に對して不可缺の要件を形づくると同じ意味に於いて、勞力その他費用の支出も亦厚生獲得に對して企てられなければならない不可缺の要件を形づくるものである。一定の費出の下に一定の設備を施して導かれたる水と何等の費出をなさずして自由に汲み出し得る泉の水とは同じものではない。此の場合に於いて費出せられる勞働、若しくはその他の費用も亦何等かの意味に於いてこの管の水がボエームの人の厚生の不可缺の要件とならなければ投せられるものではない。如何なる場合に於いても費出は價值の存在、若しくは價值の見込の存在を前提としなければ行はれるものではない。又他面に於いてシャーリングが單に獲得の困難に對して價值決定の主要なる要因を認めることも不充分である。金銀が鐵より大なる獲得の困難を以つて得られんと企てられるのは金銀に對しては鐵よりもより大なる價值成立の見込みが前提とせられるが故である。獲得の困難の大きさが財により、時により、事情により、各々異なる程度に於いて企てられるのは、彼が主要ならざる要因と等閑に附してゐる財の *Anwendung* に就いて既に一定の判斷が前提とせられてゐるがためである。凡ての費出はその種類の如何を問はず獲得せられる價值に導かれることを基

準として行はれるものである。若し費出が價值の主要なる内容をなすとすればそれは既に價值の成立する見込みの判斷に基づいてのみ可能なのである。かくて價值と費用とはその内容を同じくするものであり、唯ポエームとシャーリングとは共にその一面を捕へたに外ならない。

利用と費用の内容は相互的に充されるものであるとなす見解は自由財の無價值なる基礎を説明するに當つて、その合理的なることを證明し得るのである。ポエームは單に主觀的見地のみより自由財の無價值なることを立證せんとして居るのである。即ち彼によれば價值は稀少を前提とし、無價值は餘剩を前提とする。果して財に對して殘餘の存するや否やは一つの評價單位として取入れられる財の分量が充用せられざる財の分量に比して少量なりや否やによりて決定せられるものであるとせられて居るのである。若し此の評價の單位量が非充用の分量より少量なる場合に於いては、前者を失ふことは何等人の厚生に影響しないものであつて従つて價值なきこととなる。若し前者が後者よりその分量大なる場合に於いては事情は正に殘餘と不足の中間に立つものであつて、此の場合に於いてはその評價單位量を有する場合に於いては殘餘を意味するものであるが、一度これを失ふ場合に於いては不足を生じ、殘餘を喪失するのみならず充用せられる單位量の一部分をも失ふこととなるのである。かくの如くしてポエームは等しく財の人の厚生に對する不可缺要件を前提として自由財の説明を與へるが如くである。これに對し

でシャーリングは獲得の困難に結合して自由財を説明し、*Schäffling a. a. O. SS. 423-5.* 又オッペンハイマーが費用は經濟價值の原因であり、その測度は經濟價值の測度であるとなす立場より見れば自由財が價值を有せざるは費用をその獲得上必要とせざる論據に基づくものであるとしなければならぬ。自由財は費用を要せざるが故に價值なきものであるか、又人の厚生に不可缺少ならざるが故にその量的關係より價值なきものであるか、此の疑問は利の内容は費用によりて與へられ、費用は利用によりて呼び起されるものであるとの吾人の立場を取る場合に於いてのみ容易に解決し得るのである。ボエームの言ふ意味に於いて一種の財が餘剩の状態に存する場合に於いてはこれに對する欲望充足の緊要度は漸次低減して零に達し、又斯くの如き容易に達成せられる自由財に對しては獲得の費用の投せられる事實は存在しないこととなる。かくして自由財の無價值なることは單に費用と利用の同一性を物語るものに過ぎないのである。

ボエームは上記人の厚生に對する不可缺の要件の見地より、ラウが評價の對象並に主體の範圍の立場より「財の全體の種類の價值」*Werth ganzer Gattungen und Arten von Gütern*を「個別的に與へられた——具體的——物財の量の價值」*Werth einer einzelnen gegebenen (concreten) Quantität eines Sachgutes* 又は「一個片の價值」*Werth eines einzelnen Stückes* を區別し最高の部類價值

を多くの人に有つ物が或る場合には全然具體價值を有せざるか又は單に僅少なる具體價值を有するに過ぎざる場合が存するとの結論に到達して居る、とを非難して居るのである。ラウによれば所謂部類價值 *Gattungswert* とは人が物の利用性を一般的に人類の存在及び厚生に對して考慮する場合に於いて現はれる價值である。故に此の價值は或る種の物が人類の目的に對して有する關係を表現し、一の持續的根據に立ちて一般的意義を得るものであるが、人類は單に充用し得る機會を有する範圍に於いてのみ有用性を有する財を求めんとするものであるから、未だこの部類價值は行爲に對する動的基礎を與へるものではない。反之、財の具體的價值は人類に之れに對する獲得若しくは保存の刺戟を與へるものとして、此の財の屬する部類價值と一致するものではなく、その他多くの事情の影響を受けるものである。例へば此の財の個片若しくはその分量の需要、若しくは既に所有せられる貯藏量の増大の如きこれである。多くの所要の目的に對しては一定の種類の財の限定せられたる分量が必要である。従つてこれを超過する貯藏量は現實にその有用性を利用すべき衝動が缺如して居るが故に、殘餘として現はれるものである。故に此の所有の殘餘は流通界に於いて營利の手段としてその販賣價值によりて評價せられるものである。商取引者として此の轉賣を考慮し得ざるものは彼自ら充用し得るものと考察し得る範圍に於いてのみ一定の犠牲 *Aufopferung* を投じて生産することが出来るのである。かくしてラウ

は具體價值に對しては部類價值に作用せざる幾多の事情が作用するが故に、「多くの人に對して最高の部類價值を有する一物は屢、全く具體價值を有せざることあり、又は單に僅少なる具體價值のみを有するものである」この結論に到達したのである。(以上 Kasl Heinrich Rau, Lehrbuch der Politischen Oekonomie 1847. 5. Auf. S. S. 79-81. 參照)

ボエームはラウが所謂部類價值の成立する場合に於いても亦具體價值の成立する場合に於いても等しく稀少の原理、即ち單に財の數量的關係より同一の原則が適用せられるものであると見て居るのであると反駁してゐる。極言すれば自由財が價值を有せないのも、又その他の財が價值を有するものも、同じ原則の適用せられる二つの異なりたる場合であるとなして居るのである。例へば一の製粉者が一の隣人より水車の流れより一桶の水の汲み取りを求められ、他の隣人より水車の流れの全體を汲み取ることを求められた場合に於いて、必ずしも一桶の水に對し又その流の水の全體に對し同一の立場を保持するものではない。一面に於いて一桶の水と流水全體とに對して、等しく價值が認められるものとすれば彼はその妨げをなさざる一桶の水を汲み取ることを拒絶することとなり、他面、此の兩者に對して共に價值を認めない場合に於いては彼は全流の水を汲み取ることを一定の損失を蒙るも敢て辭せざることとなる。かくの如きは共に矛盾である。等しき水も一個人主體に對する事情によりて或は價值あるものとなり、或は

價值なきものとなる。この矛盾を辨明するためにポエームは等しく財の數量的關係を持して、ラウの上述せる使用價值の二つの區別に對して反對の立場を保持して居るのである。

ラウは「需要の限度までは具體價值は部類價值に等しく、これを限界内に於いて増加することが財産の増大である。」^{Kau, a. a. O., S. 80.}となして居る點より見て彼は具體價值が部類價值と一致する範圍を定めて居るのであるが、ポエームより見れば兩者の價值は共に一個人主體に對する異りたる立場が與へる價值の區別であるとなして居るのである。故にポエームに従へば、如何なる價值も、抽象的なものではなく、具體的な内容を有つものである。故に抽象的部類價值 *Abstrakter Gattungswert* なる言葉はポエームに取りて全く誤りたる言葉の用法となるのである。

即ち、價值が具體的經濟狀態の下に具體的個片として現はれる財に附加せられるものである限り、此の抽象的部類價值は到底實在の可能を認められないのである。こゝに於いてポエームは「單純に一の類に屬する」と言ふことはその類の保持する客觀的性質を分有することを意味するに外ならないのである。かくしてポエームは「一の現實なる意義は常に人類の幸福の財に對する依存性を前提とし、更にこの依存性は、吾々の知るが如く、貯藏量の一定の稀少を前提とするものである。然しこの要因は如何なる場合にも類に認められるものではなく、却つて此の類が稀少である一の具體的狀態より現はれるものである。」^{Böhm-Bawerk, a. a. O., S. 172.}と述べて居るのである。故

にボエームによれば單純に飲料水なる一の類に於いてはその單に人の渴を醫する力を有するものであることを確言し得るのみであつて、反對に果して渴を醫することが時に飲料水に依存して居るか、時に然らざるかは此の飲料水が餘剩の状態に存するや否やによりて決せられるものである。故に飲料水は如何なる場合に於いても價值を有するものであるとなす部類價值より具體價值への一の Generalisierung はボエームに取りては認められないのである。前述の例に於いて流れの水はボエームに取りてラウと異なる意味に於ける部類の價值であり、此の部類價值は全體として一の具體價值を意味するものである。而してラウに於ける此の部類價值が價值として成立する意味を普遍化して一個別量としての一桶の水も亦價值を有するとの結論はボエームに於いては導かれないのである。ラウに於いては抽象的部類價值と具體的なる個片價值とが一致する範圍が認められたのであるが、ボエームに於いては此の二つの價值は全然相容れないものであり、唯、一は價值を有し、他はこれを有せざることが等しく稀少、即ち財の數量的關係に基づく原理より説明せられて行くのである。

然しながら私見によればボエームがラウを批評する立場は全くその正鵠を得たものではない。但し物自體の性質より經濟活動一般が起らざるが如く、屬性 Gattung なる抽象性より經濟學上の價值も生ずるものではない。此の點は等しくワグナーと共に、W. Rögner, Grundle-ボエームの指摘
gung, 2 Aufl., 3. 52.

する所である。他面に於いてラウが屬性全體に對しては此の屬性を形づくる一個片に對すると價值判斷の異なるものとなしてゐることはボエームもこれを是認するが如く、Böhm-Bawerk, u. a. O., S. 172.吾々も亦等しく認容する所である。尤も此の場合に屬性全體に對する價值判斷とその一個片に對する價值判斷とが、よし同一の原則によりて支配せられるものであるとなすも、この支配の原則を單に數量的關係に關連してのみ考察するボエームの立場論は必ずしも正鵠を得たる所説と見ることは出来ないのである。此の點に於いてボエームが利用と費用はその内容に於いて同一性を保つものであることを看過して居るものと斷定することが出来る。吾々は彼の例に倣つて、これを證明することが出来る。原始の世界へ移住したる者に對して森林の一本は價值なきものである。然るに若しこれら殖民者に對して彼等の木材の需要が充されて居る森林全體を譲渡するか、若しくは之れを伐採し盡すことを強要すれば、彼等は此の森林に對して一定の價值を置くであらう。此の種の例は吾々の日常生活に於いて財の全量を犠牲にする場合に於いて容易に經驗せられ、ボエームも認めるが如く、これに對して一定の價值が附加せられてゐる。尤もそれは何故であるか。果して單にボエームの數量的關係によりてのみこれを説明することが出来るであらうか。無盡藏の樹木を自然のまゝに包括して居る森林の一本を失ふことは「費用の節約」*Ersparung der Kosten* を意味するものではないが、若し森林を一の全體として價值判斷

の中に取入れるときこの森林の存在は既に一定の「費用の節約」を意味するものである。一定の費用の支出が利用の内容を形づくと同じく、又他面に於いて費用の支出の節約も利用の内容を形づくるものである。若し一の財を失ふことが一定の費用を支出の伴ふことを前提とする場合に於いては當然この費用の支出に對する豫見が利用の内容をなして兩者の合一に價值成立の可能が生ずるのである。一種の財——例へば上記森林の樹木——が全量としては價值を生ずるも、部分量、即ち個片としては價值を生ぜざるは、前者の存在は費用の支出、若しくは費用の支出の節約を前提とするためであるが、後者は此の要因を充さざるによるものである。單純に數量關係が價值を決定するのではなくして財を獲得するために投せられる費用が却つてこの財の數量關係を決定するものである。ポエームはこの點に於いて等しくラウに對する批評を誤るものと見なければならぬ。

以上、吾々は價值理論上に於ける主觀主義と客觀主義とが必ずしも全く相容れざるものではなくして、何れも同じものを唯、一面より觀察し價值決定の論據を樹立せる所以を明かにしたのである。而して之れが幾多の價值論上の紛糾を生ずる源となれることをも説明したのである。價值が一定の數量的關係に導かれて一の利用標準 *Nutzenskala* の形を現はすのは、既に利用獲

得のために投せられる費用標準 *Kostskala* を前提とするためであり、この費用の標準の達成は價值の標準の成立より離れて考察することは出来ない。メンガーが最低の緊要度を有す欲望の充足——利用——が價值を決定すると見るは、オッペンハイマーが限界獲得費出——費用——が價值を決定するとなすその内容に於いて異なる所はない。限界獲得費出は最低の欲望充足、即ち限界利用が保證せられる限度まで行はれる費用の連續的支出を意味し、最低の欲望充足、即ち限界利用は限界的費出が行はれる限度まで連續的に行はれる欲望の充足を意味するものである。

かくして費出は經濟性に導かれて下段より上段に上進し、欲望充足も亦經濟性に導かれては上段より下段に低下し、兩者が或る一點に於いて一致する限界が價值の成立の測度の決定である。此の測度を決定するものは利用と其の内容を同じうする費用である。かくして價值は一點に於いて決定し、獲得せられる同種の凡ての財を支配する作用を發揮するものである。價值理論の主要題目は、此の價值の歸一性を説明することにあることは既に述べたるが如くであり、これ恰も價格理論の主要題目が經濟社會に於ける評價を異にする無數の經濟者を支配する一の價格の決定、即ち價格の歸一性を説明することにあると同じである。吾々は更らに利用と費用の内容の合一性を樹立せんと企てたる二三の學者の所見を考察し如上の所論の検討に資したいと思ふのである。

三

費用と利用との調和を説明せんとする企てに對し、先づ第一步を踏み出した學者はシェフレである。彼は經濟の概念より出發して價值理論一般が如何に此の概念によりて指導せらるべきかを明かにし、此の見地より利用と費用の同一性に到達して居るのである。凡ての經濟的活動は需要と自由財との分量に於ける *Missverhältniss* から起り、從つて凡ての經濟行爲は「大いさの決定」*Größenbestimmungen* の一の總合である。何んとなれば經濟行爲は人の勤勞、若しくは財産の利用の最少限度と、有用物と人的利用の最大限度を獲得すべきものであるからである。ヘルマンは經濟學は單に「財の大きさの學問」*Größenlehre der Güter* と名附けてゐる。シェフレはこれを不充分となしてこの大きさの決定に對し特に經濟的大いさの決定の特質を高唱し、次の四つの特性を認めてゐるのである。先づ(一)經濟は最少限の費用―可及的僅少なる費用―と最大限の利用―可及的大なる利用―の達成の目的のために、一般に最少限の大きさ最大限の大きさを導かなければならない。(二)經濟は最少限の大きさと最大限の大きさの差額 *Differenzen* oder *Bilanzen* に關連しなければならない。利用と費用の差額が一の積極的大さとして、即ち犠牲―費用―に超過する利用の剩餘として、表示せられる範圍に於いてその技術は實際上經濟である。(三)經濟は自然的大さと作用とに關連するものでなくして、倫理的―即ち人的―力の費出の大いさと倫

理的——即ち人的——利用の効果、換言すれば倫理的なる犠牲とその效果に關連するものである。

(四) 經濟は費用と利用の差額の總合、即ち「秤量せられたる總合的大さの決定」 *Abwägende Collectivgrößenbestimmung* である。それは經濟が限定せられたる一時點に於ける單獨なる欲望に對する單獨なる利用の効果に對してはなくして、人の最大の全體の促進と最少の生活上の犠牲に對しては向けられて行くものであり、否、極端なる場合に於いては、經濟は個人所得若しくは國民所得の有効なる形成、分配、支出、繼續により全倫理社會の満足に向けられるものであるためである。

經濟としての大さの決定は一の内的過程 *innerer Process* を前提として表示せられるものである。内的過程は計算的理性と價值決定的感覺の相互作用によりて、生産せられる財と消費せられる財との費用と利用の大さを概念と感覺に導くものである。而して *innere Anschauungsgrößen* としての大さの決定は後に起る實際行爲を決定し、かくして適當なる外的シンボル、即ち貨幣價值により數量的に概念せられ確定せられるものである。かくして此の重要な過程が價值評價 *Werthschätzung* 若しくは價值の附與 *Wertgebung* である。「價值の大さの決定」 *Wertgrößenbestimmung* は各個の財が費出する——現に費出し、將來費出すべき——最少の犠牲と現にこの財に歸屬し、將來之れに附與せられる最大の利用との反映と秤量により行はれるものである。

る。此の計算、計慮及び秤量より諸財の利用と費用に關し、確定せる數量的價值概念が生起する。即ち費用價值と使用價值の測度である。この費用價值と使用價值の測度は經濟者の精神の内に於いて諸財と結合し、「氣まぐれ」の所産でもなく、嚴密なる客觀的需要並に生産關係の經濟的考慮の結果である。(以上 A. F. F. Schaffle, Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft. dritte Auflage, 1873. SS. 20—1, S. 22. 參照)

かくてシェフラーによれば、經濟は利用價值の費用價值と大いさの決定として現はれるのである。費用價值とは一定量の使用物に關してその最少の費用——過去現在若しくは將來——に着眼して之れに歸屬してゐる意義である。使用價值、即ち利用價值は同一使用物に關し最高可能の利用に着眼して之れに歸屬する意義である。斯くの如き立場より出發したるシェフラーは極めて重要な結論に到達した。即ち、眞に經濟的意味に於いて「價值ある」Wertvoll の意味は、認識せられ且つ計量せられたる利用が、少くとも認知せらるゝ費用を獲得することの出来る財に就いてのみ認められるものであること之れである。かくして眞の經濟價值とはシェフラーによれば「費用價值と利用價值によりて成立する差額の大きい」eine aus Kosten und Nuzwerth zusammengesetzte BilanzgröÙe である。

上記、シェフラーの利用と費用の調和は、利用の内容は費用によりて與へられ、費用の決定は

利用に導かれるものであるとの立場を保持することによりて初めて成立の可能を有つものである。此の點に於いてシェフレーは利用と費用の Identifizierung を認めて、これを一の理論的體系に築き上げた最初の人として價值學說史上に於いて重要な地位を占むる者である。以下吾々は更らに彼が如何に利用と費用を調和し、その同一性を獲得したかを吟味して見たいと思ふのである。

費用價值は經濟價值として最少犠牲の計慮より生ずるものである。故に財の直接の生産に對しても間接なる獲得に對しても、一財に對してその犠牲の最少限度以上の費用價值を與へることは經濟的に不可能である。故に費用價值の評價とは最も低廉なる技術的即ち商業的調達を意味するものである。これに對して使用價值、即ち利用價值は經濟價值として最大限の満足を獲得する手段として一財に對し附加せられる意義である。故に直接なる自己消費に於いても、又間接なる供給に於いても、人的利用の最大限以下の意義を一財に對し經濟的に與へることは出來ないのである。かくしてシェフレーは、一面に於いて費用の最少限度を決定し、他面に於いて利用の最大限度を決定したる點は、オッペンハイマーが限界の獲得費出を認め、メンガーが最少の緊要性を有する欲望充足を認めたる二つの立場を同一經濟者の内面に局限し、之を純主觀的に調和せんとしたるものである。此の調和は總て利用と費用の内容に於ける調和に進む

第一步である。

さて上記の費用価値と使用価値の差額は經濟行爲に對する決定を與へるものである。自己若しくは他人の得る使用価値が自己若しくは他人の投ずる費用価値を越えて低下する場合に於いては、財の生産も消費は起るものではなく繼續せられて行くものでもない。何人に對しても此の価値の非經濟的なる差額が現はれる限りは、技術的生産の能力と人的消費の意志は實行せらざるものとなり、何等の効果を齎らさないものである。これ等の人は財を獲得せず、かくして有效なる供給と需要の列外に脫離しなければならないのである。唯、 g (使用価値) — k (費用価値) が零點に達せない場合、詳しく言へば、經濟的均等若しくは無差別の點に歸着しないか、消極的大いさ、詳しく言へば、經濟的害惡の點に歸着しない場合に於いて——若しこれを經濟の主體より見れば凡ての人に對して此の歸着が現はれない場合に於いて——財は經濟的營利乃至は消費の上に於ける興味を得ることとなり、此の興味はそれが他の財に比較して零點を遠ざかるに従つて増加して行くものである。かくして費用価値と使用価値の「開き」が一定の生産若しくは消費の行爲に對する刺激となり若しくは妨害ともなるものである。事實上存在し、若しくは新たに起つて來る二つの価値の見解より經濟的決定が生れて來る。そして生産と消費の一切の行爲と經濟の實際的決定が現はれて來るのである。經濟は一面に於いて人の勞働乃至はその不快感

の最少限度、他面に於いては人の生活促進乃至は満足の最大限の有効なる差額 Differenzierung 相互的決定 Reziproke Bestimmung 若しくは平均化 Bilanzierung として現はれるものである。こゝに於いてシェフレーは國民經濟的價値の概念が使用價値と費用價値の差額の概念として、上記の經濟の概念と全く一致することを力説して居る點は、恰も後世リーフマンが費用と利用の比較に經濟の本質を眺めんとする立場とその趣きを同じくする。こゝに於いてシェフレーに従へば「個人經濟的價値とはその存在が制限せられてゐる外的有用物がその利用と費用なる分量的關係を顧慮したる場合の意義である。簡單に云へば、一定の場所、一定の時に於いて、一定の人に對する一定の有用物の利用價値が費用價値に對する數量的關係である」と定義せられてゐる。

シェフレーは此の價値の決定の相關的意味より利用と費用の合一性に到達してゐるのである。即ち、「經濟價値は利用價値が費用價値を超過すればそれ程大きくなるが、兩價値が均等する場合に於いて零に低下し、又前者が後者を越えて低下する範圍に於いて無價値に變化するものである」Schiffke, a. a. O., S. 168. 若し此のシェフレーの論據はリーフマンの所謂 Proportionalitätsprinzip を暗示し之をを推進めるときは、必然的に利用と費用の内容の同一性が樹立せられる譯である。即ち彼は從經濟價値が成立するためには利用價値が費用價値を超過することを前提とし、つて大なる利用價値は又大なる費用價値を以つてするも實現の可能を有し、かくて經濟價値成

立の可能を與へるものであるが、これと同時に小なる利用價值が經濟價值を成立せしめるためには、當然これを超過せざる小なる費用價值を前提としなければならない。而してシェフレの主張するが如く經濟行爲は此の兩價值の差額の決定に存する限り、大なる利用價值は大なる費用價值の原因となり、又大なる費用價值も大なる利用價值の原因としてのみその存在を確保せられることとなるのである。反之、小なる利用價值は單に小なる費用價值の原因となり、又小なる費用價值も小なる利用價值の原因としてのみ確保せられなければならない。かくして因果關係的に利用の限度は費用の限度を劃し、費用の限度は利用を劃し、共にその内容と同じくするものであり、經濟價值の決定はこの兩者の合一化の作用に促されて初めて達成せられるものとなる。こゝに於いてシェフレは「一財が全く利用を有つものと認められず、又如何なる場合にも費用——又は *Entbehrung*——を惹起するものと認められず、又それは利用が費用に追從せざるものと認められる場合に於いては經濟價值を得るものではなく、單獨經濟に於いても國民經濟に於いても現はれて來ない」との結論に到達したのである。O. S. 198. ^{Shaffle, a. a.} 故に先づ(一)財が孤立經濟に對立するにせよ、社會に存在するにせよ費用なくして獲得せられその所有を失ふも *Entbehrung* を惹起しない場合には、常に如何なる事情の下に於いても經濟價值を獲得するものではない。孤立經濟も、探し出されたる稀少なる有用物を以つて、若し此の有用物がその稀

少性のために或は費用を生じ少くとも *Entbehrung* を生づる場合に於いては、經濟的に活動をして居るのである。然るに孤立經濟を離れた社會に於いては、凡て稀少なる自然の恩惠物はその探索者以外の者には費用を惹起するものである。(二)如何なる事情の下でも、又何人に對しても有用に非らずと認められる財は經濟價值を得るものではない。(三)或る種の財の利用が費用以下に低下する者に對しこの種の財は經濟價值を有つものではない。かゝる事情の存する場合に於いては、孤立經濟に於いては此の種の財の生産と消費は無條件に放棄せられ、國民經濟に於いてはその生産と消費とはこの財の利用が費用に達せざる人によりてのみ放棄せられることになるのである。(以上は A. E. F. Schüffe, a. a. O. S. S. 106-9 參照)

以上述べたる所によつて見るが如く、シェフラーは、費用なき所に經濟價值存せず、利用の見出されざる所に經濟價值の成立せざること、又利用に對する費用の有利なる關係が失はれたる場合に於いて經濟價值成立の可能が奪はれることを、述べて居るのである。此の利用と費用の調和の見地より、彼は經濟價值は全く費用に依存せずとなし經濟價值決定に於いて問題となるものは利用にして費用に非ずとなす限界利用學說に立つ見解を不合理なりとして斥けんとして居るのである。勿論、自然の自由なる恩惠物も、その存在が制限せられて居る限り、經濟價值を有し、經濟的取扱ひを受くるのであるが、それは單に利用を有するがためではなくして、

之れを得るために當然起る勞働の犠牲、若しくはこれを失つた場合に起る Entbehrung のために經濟價值を有つのである。詰り彼は飽くまでも經濟價值は利用と費用の數量的關係價值 Quantitative Verhältnisswerth von Nutzen und Kosten であるとの根本見解を徹底せんとして居るのである。シェフレーに於ける此の利用を費用の合一性の樹立は、彼をして聽て「一の時間に於ける多くの個人的費用價值と利用價值の下に確定的なる一の價格が一般的社會的の調節となり、又中間的の大いさとなり、之れが個人的評價より隔つてゐることが競争に干與せる單獨經濟に對しその財の利用と費用の異なる關係を決定し、即ちこの單獨經濟に對してその財の異なる個人的經濟價值——又は unwerth——を標準的に決定することとなる」の所論を導かしめた。

Schäffle, a. a. O., S. 169. 之れ彼が所謂自然的交換價值 Dar Natürliche Tauschwert を定義して「自然的交換價值とは供給の系列を形づくる個人的費用價值の大きさと需要の系列を形づくる使用價值の大きさの中で、凡ての交換當事者の正常なる經濟的競争の下に供給量と需要量を全般的に一定の平衡狀態に置く所の額 Satz である」となしてゐる所以である。Schäffle, Ibid., P. 194. 之に於いて社會的に可能なる「最大量」Die gesellschaftliche mögliche grösste menge が、純利用を創造することとなり、交換財の國民經濟的價值尺度として現はれるものである。この點は恰も後世ボエーム・バーヴェルクが「賣手と買手の兩側に競争が行はれる場合に於いては市場價格は交換を達

成する最終の買手と交換より除外せられたる最も交換能力ある賣手との價值評量によりてその上限が與へられ、¹⁾交換を達成したる最も交換能力の少い賣手と交換より除外せられたる最も交換能力ある買手との價值評量によつてその下限が與へられる範圍内に於いて決定せられるものである」²⁾となし、市場價值の高さは二つの限界對偶の主觀的價值評量の高さによつて定まるとなす點とその趣を同じうするものである。³⁾ Böhm-Bawerk, a. S. 278-9 シェフラーは價格理論に於ける限界對偶の法則の創設者である。

利用と費用の合一化が價值を決定するとする見解は更らにデューチエルに於いて論理的に説明せられて居るのである。此の意味に於いてデューチエルは一面、古典的價值理論を固持する同時に他面、これが近代主觀價值理論の根本見解と矛盾せざることを力説し、近時に於ける所謂、價值學說史上に於ける二面的價值理論 Die Dualistische Werththeorie の先驅をなしたのである。

彼の價值理論は主觀價值學說が財の數量的關係を以つてその出發點となしたるに對し古典價值理論例へばリカルドのそれが之れと相容れざるものに非ざることを説明せんとする立場を保つものである。即ち彼によれば「利用と稀少性」Nützlichkeit und Seltenheit と「利用と勞働費

出」Nützlichkeit und Arbeitsaufwandとは、恰も言葉としては異なるものであるにせよ、その内容に於いては同一のものを指示するものである。彼は此の見地より古典價值理論に客觀性と共に主觀性が含まれて居ることを考證し、價值論上の新舊兩理論が何等異なるものに非ざることゝを力說せんとしたのである。かくて彼は價值を得る財は支配的判斷が具體物に對して「利用と制限」Nützlichkeit und Begrenztheitを附加する所のものであるとの見解は舊價值論者に對しても徹底的に分明せるものなることを述べて居るのである。唯この論者に對しては「利用と制限」の命題が異なる若干の言葉を以つて言ひ現はされて居るに過ぎないのである。故にデイーチェルは新價值論者が古典的價值理論に對して投ずる所見の輪廓は、次の四點に於いて修正を必要とするものであることを述べて居るのである。

一、古典的價值理論は、凡ての價值、即ち使用價值も交換價值も利用性 Nützlichkeit に基づくものなることを教へてゐる。従つて古典理論は、新しき論者の主張するが如く、使用價值を専ら利用より説明したのでもなく、又任意に増加し得る財の正常的交換價值を専ら費用より説明したのでもない。(此の點 Böhm-Bawerck, Artikel „Werth“ S 687. 參照) 否、リカルドは、出來得る限り明確に、利用性は交換價值に對して「無條件に本質的」のものであると述べて居る一の財が全く利用し得るものに非ざるときは、換言すれば更らに吾人の幸福に寄與し得ざると

きは、凡ての交換價值は皆無である。(此の點 Ricardo, Principles Political Economy and Taxation. (Gonner's Edition) P. 6

若しボエーム・バーヴェルクは、古典價值論は交換價值の測定、Maassを費用よりて説明せられるものであると考ふるものとすればこれは正鵠を得たるものである、とデューチエルは述べて居る。然しながらボエームの不明瞭なる解釋は恰も交換價值の基礎、Grundを費用によりて説明したもののどの誤れる解釋を生ずる恐れがある。かくてデューチエルはエミール・ザックスが此の點に就いて誤りを明瞭に指摘して居るものとなして居る。即ちザックスに従へば、「近代主觀理論と同じく古典論も價值に於いて利用性以外の財の性質、即ちその財が勞働生産物である性質を認めるものである。財は勞働を費出したるものなるが故に此の性質に應ずる價值を有つものである。……事實上斯くの如き理論——上記の性質を認めない理論——が何うして確定的祖述者を得るかは信じられない」(此の點 E. Sax, Die neuesten Fortschritte der nationalökonomischen theorie, 1889, S. 21. 參照)となして居るのである。かくしてデューチエルは主觀價值理論も全く客觀的方面たる財はその獲得に一定の費用の支出を必要とする性質を脱却し能はざるものであることを認めて居るのである。而してこの性質を認めざる價值理論は事實上存在して居らないことを述べて居る。更らにデューチエルは、古典價值理論が利用性に基礎して居ることを辯

明するためにコモリンスキーが「正しき根本見解——財の利用の作用はこれが依存して居る財そのものに再歸するものであるから、吾々が精神に於いて行ふ決定より價值は生ずるものであるとの見解——に對しては勞働のみが價值の唯一の源泉であるとの誤れる見解は消失する」(此の點に關しては F. v. Komorzynski, Das Wesen und die beiden Hauptrichtungen des Socialismus, 1893, S. 13. を參照)とせる立場に反對して、此の誤れる見解は寧ろ批評者たるコモリチンスキーの側に存するものであるとなし、リカルドもトンブソンもマルクスもロートベルトゥスも新しき論者と同じく利用性が價值の唯一の源泉であることを強調したのであつて上記の批評はその當を得ざるものである、と述べてゐるのである。

二、古典價值理論は、價值が成立するためには利用と制限が共働 *zusammenwirken* するものであることを看過しては居らない。新しき主觀價值學說の先驅者として引用せられるガリアニ及びチルゴーに於いても亦同じくリカルドに於いても、此の共働の認容は見受けられるのである。財の利用とその制限との共働が古典價值學說にも含まれて居るとの見地より、ディイチェルはリカルドを辯護して居るのである。即ち、リカルドは「財が利用性を有する限りは、その價值を二つの源泉より導くものである。即ち財の稀少性と之を獲得するに必要な勞働の分量、これである。——財の中には、その價值が専ら稀少性によりて決定せられるものがある。勞

働はかゝる財の分量を増加し得ない。従つてその價值は供給の増加によつて低下しない。稀少なる彫像繪畫書籍鑄貨乃至はその分量が制限せられてゐる土地に耕作せられる葡萄からのみ製せられる特別品質の葡萄酒の如きこの部類である。その價值は之を生産するに本來必要なる勞働分量を全く離れてその所有を要求する人の富及び嗜好の變化により變動するものである。然しこれ等の財は單に日常、市場に於いて交換せられる財の分量の極めて僅少なる一部分を形づくるのみである。欲望の目的物たる財の大部分は勞働によつて生産せられ、若しそれを獲得するに必要な勞働を授下せんとすれば一國に於いてのみならず數國に於いて殆んど充當せられる制限なく増加し得るものである」Ricards, P. 6と述べてゐる。上記古典價值理論の核心を含む説明より新しき論者はリカルドーが一面に於いては主觀的利用性を價值の源泉となし、他面に於いては客觀的稀少性を等しくその源泉となし、かくして價值に對して二面的説明を與ふるものとして非難してゐるのである。これに對してデイーチェルは此の非難が必ずしも當を得たるものに非ずとなして極力リカルドーを辯護して居るのである。勿論、リカルドが「利用と制限」が二つの價值源泉であるとの法則を豫め説明することなくして直ちに價值の詳しき説明に立入つた點に於いては、一定の非難を免れないのであるが、彼は必ずしも價值の成立を二つの相容れざる方法によりて説明したのではなくして、單に絶對的制限の分量 Die a. solut. begrenzte

Quantität への相對的制限 Die relativ begrenzte Quantität の分量とを區別したに過ぎないものである。絶對的制限の關係とは、財の價值がその稀少によつて決定せられるものであり、相對的制限の關係とはその價值が勞働の費出によつて決定せられるものである。かくしてリカルドはその不備なる原理の説明方法に就いては非難せられるべきものであるが、此の説明方法に對する批評、即ち「財はその價值を利用と稀少より獲得するものであるとのテーゼは大部分の財はその價值を利用と勞働費出より獲得するものであるとなすテーゼと矛盾するものである」との批評が、却つて非難せらるべきものである、とデイーチェルは辯明して居るのである。かくしてデイーチェルは「利用性と制限」の共働は「利用性と費用支出」の共働を前提として可能なるものであり、否、兩者は同一なものであるとなして居るが如くである。リカルドに對する此の誤れる批評をなせるものとしてデイーチェルはツッカーカンドゥルを擧げて居るのである。故にこれに就いて少し述べて見たいと思ふ。

ツッカーカンドゥルの批評の要點は、何故に價值は唯一の態様に於いて、同一の前提の下に生ぜざるかの疑問にある。此の批評は新價值論者が古典價值論者を批評する場合に於ける特質の様である。又等しくポエム・バークヴェクもこれと同様の批評をなすが如くである。John Lawark, Güterwerth, S. 18. — Artikel ツッカーカンドゥルは「財の生産が價格に比例せざる勞働を費出する場合

„Worth“ S. 687.

Manuscript des

にも、その財が價值を取得するものとすれば——例へばリカルドが稀少なる繪畫、鑄貨等に就いて主張するが如く、——他の凡ての財も同じく、これに共働する同じ理由によりその價值を得るものに非ざるか」の疑問を發してゐる此の疑問に對してデイーチェルは絶對的制限の分量關係にある凡ての財は同じ理由によりて、その價值を得るものであり、リカルドはこれを否認せざることを根據として上記疑問に辯明をなして居るのである。然らば「一の種の財——上記の再生産せられざる財——に於いて購買力の高さが買手の富と嗜好に依存するものとすれば何故に凡ての財に對して、此のことが當條まらないのであるか」リカルドに對するこの疑問に當面したるデイーチェルの辯明は、上記再生産せられざる財の價值決定の基礎は凡ての財に當て條るものであり、リカルドは必ずしも他の財の種の財、即ち再生産せられる財に對して、これが當て條まることを否定するものでない、となす點にある。最後にリカルドは單に稀少の財に關しては價格決定の要因を與へたるものなるも、任意に増加し得る財に關してはこれを與へたるものに非ず」との疑問が試みられるのである。即ちリカルドは、後の財に關してその價格の高さは通常主として、費出の高さに從つて定まるものである、と述べてゐるに止まる。即ち「リカルドは任意に増加し得る財に對しては單に價格の正常的狀態を特色づけ、單に一の完成せられた結果のみを表明してゐるに過ぎないのである。而して如何なる力が此の結果を生じ、此の結果が成立する

ためには如何にして價格の決定的要因がつくられるかと言ふことは不明のまゝ止められて居る」この非難之れである。此の非難に對するデューチェルの辯明は「勿論、リカルドに於ける價值に關する緒論に於いては此のことは不明のまゝ葬られて居るのであるが、その時その時に於ける最も有利なる生産の機會を利用せんとする企業家の努力が此の結果を齎らす力である」となす點に見受けられるのであつて、生産者の努力が消費者の利用性を離れて考察し能はざる限り、任意に増加し得る財に對しても論者の非難の如く、リカルドは必ずしも價格決定の要因を看過しては居ないものであるとデューチェルは解釋して居るのである。かくしてデューチェルはリカルドの價值理論にも「利用と制限」の共働の含まれることを認めるものであり、假令リカルドに於ける形式上の短所を認めるとしてもそれに對するツツカーカンドウルの上記批評は更らに不満足なるものであるとなして居るのである。而してツツカーカンドルの批評が、かく不満足なる所以は、デューチェルに従へば、彼は古典價值論の他の反對者の如く「利用性と稀少性」と「利用性と勞働費出」二つの方式が言葉としては相異してゐても、その内容に於いては同一なることを認めざる點から推測せられてゐる。即ち第二の方式に於いて勞働の費出が擧げられて居るのであるが、此の勞働の費出は既に述べたるが如く稀少の二つの原因、即ち財が相對的に制限せられたる分量の關係に立つ場合を意味して居るのである。かくの如くデューチェルが、勞働

の費出は財の稀少性に對して一定の關連を有つことを力説する點はその根底に於いてポエーム、バーヴェルクが等しく此の稀少性を以つて財の利用を説明する不可缺の條件となしたる點と異なる所である。而して彼が古典的價值理論が必ずしも近代的主觀價值理論と其の内容に於いて異なるものに非ざることを述べて居るのは稀少性は勞働の稀少に基づくことによりて確立せられるものであると見るが故である。かくしてディーチェルによりこの見地より此の新舊兩理論が別個のものに非ざることが立證せられる譯である。

こゝに於いてディーチェルは、一面、勞働が財を増加し得ざるが故に財は稀少であるとなし、この稀少性を受けるものはリカルドの勞働によつてその量を増加し得ざる種類の財である。これが稀少性を導く一つの原因である。他面、財は増加し得るもそれは單に勞働によりてのみ増加し得るが故に、大部分の財は稀少となる。この稀少性を受ける財はリカルドに於ける勞働によりて任意に増加し得る種類の財であり、此の場合に於ける稀少性の原因は勞働自體が一の稀少にして制限せられて處分し得る手段があるからである。即ちディーチェルは「勞働の費出される凡ての財は稀少である」Alle Güter, welche Arbeit kosten, sind Sellen.との見解に到達して居るのである。かくてディーチェルの解釋に従へば、リカルドは價値の相容れざる二つの成立の種類を認めたるものでなく、而かも二つの方式、即ち「利用と稀少」と「利用と勞働費出」の間に何

れか一の方式を選択すべきものに非ずして、此の兩者が共に一の普遍的法則に綜括せられるものであることは屢々彼によつて主張せられたる所である。(此の點に關しては H. Dietzel *Classische Werththeorie*, S. 566-567.-S. *dasselbst die Citate aus Burnslagui, J. Garnier und Kayser*.—Vgl. *ausserdem die Stelle bei Hermann, a. a. O., S. 12.* 參照) 而して彼は從來、限界利用論者が恰も稀少と勞働費出とは矛盾し、少くとも關係の外に立つものであると看做して、敢てこれを修正せざることを難するものゝ如くである。

三、新價值論者は、一部の論者が價值は利用性に對する人の主觀的判斷に基づいて居ることを主張して居る點を稱揚して居るのである。これは恰も讀者に一の獨創であるかの如き觀を與へるのであるが、古典的價值理論と雖も決して價值判斷の主觀性を等閑に附してゐるものではない。

此の論證として ディーチェルはリカルドを引用して居る。即ち、リカルドは「各人はその心意にその享樂物の價值を秤量する測度を有つものである。唯、此の測度は人間の性格の如く異なつて居る。……各人は若し一瓶の葡萄酒の價格が三シリングに高められても同じ分量を續けて飲むのであるが、四シリングを支拂ふ位なれば寧ろ葡萄酒の享樂を放棄するであらう。他の者は四シリングを支拂ふことを可とするであらうが、然し五シリングを支拂ふことはこれを

辭するであらう。……多くの人は一匹の馬が生ずる快樂に對して五磅の費用を支拂ふであらう、然し何人もこれに對して十若しくは二十磅は與へないであらう。之れは人は支拂ひをこれ以上増加し得ざるが故に、葡萄酒若しくは馬の使用を放棄するものではなく、これ以上支拂を増加することを欲せざるが故に、放棄するからである」となして居る點がこれである。又デューチェルは「勞働は價值の唯一の親である」となして居る典型的なる客觀的價值論者と目せられて居るトンブソンに於いてすらも價值の主觀性が窺はれるものであるとなし、トムソンは而かも此の主觀的要因を烈しく且つ屢繰り返して主張したる學者と論斷せられて居るのである。即ち彼が「欲望の存在は價值の生ずる唯一の條件である。かくの如き欲望のために勞働は物に對して投下せられる。若し欲望がなければ強制による場合を除いては、勞働が使役せられるものではない」となして居る點これである。(この點に關しては W. Thompson, Distribution of wealth, P. 112. 參照) その他ロードベルトウスが、「價值は事物の性質ではなくして、此の事物が欲望の結果置かれる状態である」となせる點、マルクスがトンブソンの如く詳細には非ざるも使用價值、即ち具體的主體によりて認められたる物の利用性を價值の條件と稱して居る點等は、悉くデューチェルに従へば「凡ての價值は主觀的のものである」との命題を前提とするものと解せられて居るのである。かくしてデューチェルは物に生ずる利用のために勞働は成立し、その物に對し

費用が投下せられるのである。即ちこれ等の古典的價值理論は「利用は費用を決定する」ものなることを陳述して居るのである。

更らに新價值論者は舊き利用論者が費用論者に反對を試み、物は費用を要求するが故に價值を有つものではなく、その物は費用を償ふ價值を有するが故に却つて費用が之に投せられるものである、としてゐる點を稱揚してゐる。Böhm-Bawerk, Artikel „Worth.“ S. Ggo.-E. Sax, a. a. O., S. 22.これに對してデューチエルは所謂費用論者と雖も費出の動機、*Motiv*が價值であり、利用であることは必らずしも否定せられたるものに非らずと、辯明して居るのである。即ち費用論者も、一の財に對して支出せられる費用の測度乃至は一の財が市場に於いて獲得する價格の測度は需要者が財に置く利用の測度によりて説明せられるものであり、即ち消費者の使用價值の價評は費用と價格がその最大限に於いて如何なる高さとなるものであるかを決定するものであることを考證してゐる。

ボエーム・バーツェルグは、新しき價值理論と傳統的なる古き費用理論の根本的な唯一の區別點を新價值理論より見て、價值が費用によりて説明せられることは未だ完結したる説明ではなく、固有の生産費にせよ市場價格に現はれたる購買費用にせよ、費用の高さは「尙ほ説明を必要とする現象」であり、此の説明は詰まり利用若しくは限界利用による或る初元の價值秤量に對する一の歸結を必要とするものである點に求めてゐるのである。これに對してデュー

チエルはかくの如き唯一の區別なるものは「無用の喧噪」Viel Lärmen um Nichtsであるとなしてゐるのである。即ち費用論者と雖も費用の高さが利用秤量によりて説明せられることの必要を認めてゐたのである。若し一瓶の葡萄酒の價格が三シリングであるとするなれば、費用の關係は賣手が此の價格で販賣をなすことを許し、かくして競争は賣手をして此の値段で販賣せしめるものであり。他面に於いて買手は此の一瓶の葡萄酒を三シリングに秤量してゐるのであり、費用論者と雖もこれ等の事實を忘却してゐるものではない。デューチエルは新しき價值論者と古き價值論者の區別は後者は此の第二の自明なる命題、即ち主觀的價值秤量を單に附屬的に陳述してゐるのであり（例へばリカルドー、トンプソンに於けるが如し）、又新論者はこの命題を一船的に表示してゐるのである。かくして新論は、その批評に於いて古典論者が價值の根柢としての利用、乃至は消費者の利用秤量が價格の高さに及ぼす影響を認める立場を保持してゐたことを忘却してゐるのである。

斯くの如くして凡ての價值はその泉源を利用性の計慮に有し、利用論者の述べるが如くそれは精神的過程に根ざすものである。然し此の認識は古くして、唯、その表現のみが新しいものであるとはデューチエルの古典價值理論に對する辯護の主點をなしてゐるのである。而して吾々は此の古典理論の中に含まれる主觀的利用性を窺はんとするデューチエルの上述せる學說的史考

證の裡に明かに彼の價值論の立場としての利用と費用の調和を認めることが出来るのである。

四、古典價值理論は一面に於いて勞働によりて増加し得ざる財の價值は「利用と稀少」に基づき、他面、勞働によつて増加し得る財の價值は「利用と勞働費出」に基礎して居る點を區別してゐるのであるが、この事は此の古典理論が全く正しき結論に到達してゐることを意味するものである。即ちデューチエルは既に述べたるが如く、勞働自體が一の稀少性を保つものである限り勞働による生産物も一定の稀少性を有つものであることを認めるが故に「利用と稀少」と「利用と費用支出」の二つの命題は矛盾するものに非ずと解釋し、古典價值理論も近世利用價值理論と同様、正しき立場を保持するものなることを論證してゐるのである。唯、アダム・スミスはその例外として勞働をその生産物に價值が附加せられる基礎となし、かくて利用の決定をなさざるものとしてデューチエルは、次のスミスの章句を引用してゐるのである。即ち「各、物の物の眞の價格、即ち各、物がこれを得んとする人に對して眞に費用となるものは、これを得る勞苦と困難である。各、の物がこれを得たる人に對し、これを處分し、これを他の或る物と交換せんとする者に對して眞に價值あるものとなるのは、此の物が彼自身に節約し乃至は他人に課する勞苦と困難である。貨幣若しくは財を以て購買せられる物は吾々自身の身體の苦痛を以つて獲得する物と同じく、勞働を以つて購買せられるのである。その貨幣若しくは財は、此の勞苦

を吾々に節約するものである。……凡ての時、凡ての所に於いて勞働の等量は勞働者に對して、等しき價值を有つものであると言ひ得る。健康、力、精神の通常の状態に於いて、その熟練並に技倆の通常の程度に於いて、勞働者は常に彼の平安、自由、幸福の同じ割合を常に投下してゐる筈である」となしてゐる點これである。即ちスミスは單に投下せられる勞働のみに着眼して、何に基づいて此の勞働が投下せられるかを説明して居らないのであつて、此の點はリカルドがその勞働價值學說の根柢に利用性を置きたる點と異なる所である。従つてデイーチェルによれば古典價值學說が近世の利用價值學說とその内容を同じくして居ると論證する點に關して、スミスの價值論は一の例外をなすものと見られて居る様である。(以上 H. Diezel, Theoretische Socialökonomik, 1895, S. 226—33. 參照)

以上の如くデイーチェルは、古典價值理論の中にも近世主觀價值理論の要點が含まれてゐるものと見てゐるのである。彼は再生産し得る物と再生産し得ざる物とを區別し、その價值の決定を説明してゐる。再生産し得る物の範圍は一定してゐる。或る主體が何を再生産するかの問題は利用と費用の差額 *Eine Nutzen- und Kostenbilanz* の根據に立ちて決定せられるものである。こゝに再生産が有利に行はれ得る A、B、C の三つの物があり、その各の生産費は一〇、二〇、三〇とする。此の主體は A の利用を一〇より高く評價し、この場合に若し一〇〇の費用を要す

る場合に於いてもこの再生産を行ふものとする。又Bの利用を二〇より高く評價し、若し四〇の費用を要する場合に於いても再生産を行ふものとする。又Cの利用を漸く三〇に評價し、然るに三五の費用を要する場合に於いては最早や再生産の意志はなくなるものとする。此の場合に於いて果して利用と費用の間の餘剰が何程であるかに拘らず凡ての物は若しその利用と費用の差額が一の利用増餘 *Nutzenplus* を生づる場合に於いては、これ等の物は費用によりて秤量せられ、従つてA、B、Cの價值關係は一・二・三の割合を保つものである。このA、B、Cに對してはその蓄積量、若しくは需要が變化するに従つて、それ等に對する主體の限界利用の判斷は變化するものである。即ち、此の主體は假りにその費用が五〇を超過する場合に於いてはAを、三五を超過する場合に於いてはBを、三四を超過する場合に於いてはCを再生産せざることをする。然るに若しA、B、Cが以前と同じく一〇、二〇、三〇の費用によりて再生産せられる場合に於いては此の利用の變化はその價值關係に何等の變化を與へるものではない。然るにAの費用は一〇に非ずして二〇となり、Bの費用は二〇に非ずして三〇となり、Cの費用は等しく三〇に止る場合に於いてはその三者の價值關係は二・三・三となるものである。かくしてデューチエルは、次の結論に到達してゐるのである。一A、B、Cの利用がその費用を超過するものであると主體が判斷する限りは、此の主體はA、B、Cをその費用に従つて評價するものである」ここに

れである。尤も、この場合A、B、Cの再生産に與る費用手段に對する限界利用も等しくその蓄積量若しくは需要によりて變化するものであるが、少くともA、B、Cの利用がその費用を超過する前提の下に於いては此の三者の價值關係には何等の變化も起るものではないのである。

かくして一つの物が果して再生産し得る財の部類に加へられるか否かは「利用の差額」、即ち利用秤量の比較 *Vergleichende Nutzenschätzung* によつて決定せられるものである。而してこの物が何程の價值を有つかは再生産費によつて決定せられ、再生産費は「利用を有し制限せられたる手段」(即ち貨幣若しくは勞働)の何程かの單位數の喪失を意味するものである。即ち、再生産に附隨せられてゐる費用手段の單位の大きさと、これが投せられる場合に失はれる利用の大きさとは同量である。即ち、ディーチェルは「利用と費用の差額」 *Bilanz zwischen Nutzen und Kosten* は一定の制限手段の費出によりて獲得せられ、而して主體が自由に選擇しなければならぬ「多數の利用の差額」 *Bilanz zwischen der verschiedenen Nutzen* に外ならないものであると見てゐる。即ち、彼によれば費用とは「失はれる利用」 *Nutzeinbuss* を意味するものであつて、一の利用は物の存在によつて定まりそれが失はれることによつて此の利用が無くなる物を費出することを意味するものである。O. S. 193. *Diezel, a. a.* かくしてディーチェルは費用を以つて利用の一面を現はしてゐるものであるとなし、從來、經濟學者が費用は客觀的要因であるとなしたる

に對して必ずしも費用は客觀的要因でなくして、等しく主觀的要因であるとの見解に到達したのである。勿論、彼に於いても、費用の大きさによつて定められたる「差引かるべき利用」Nutzeninus が出現すること自身は客觀的事實として考察せらるべきことであるが、此の客觀的費用要因も主觀的利用要因と同じく、終局に於いて主觀的に判斷せらるべきものとなし、費用の主觀性を高唱してゐるのである。O. S. 199, 111 に於いて上述の如く一主體は再生産し得る物を費用に依つて評價すると言ふことは「費用手段の分量に依存してゐる利用によりて評價すると言ふこと」と同じである。かくして凡ての物はその存在は手段を節約し、その缺如は手段を費出する點に於いて共通なる利用を有するものであり、此の利用は唯、質的に同一であり量的に異なるのみである。故にディーチェルは之れを「手段利用」Mittelnutzen と名附け、その分量の多少によりて再生産し得る物の價值の大きさが定められるものと見てゐるのである。若し物と物との間に費用關係が定められる場合に於いては、その價值關係が數字的に決定せられるものである。即ち、ディーチェルは次の法則に到達したのである。「再生産し得る物に於いては失はれる利用の測度は再生産費の大きさ即ち、手段利用の大きさによつて測定せられるものであること」之れである。

次に再生産し得ざる物に於いて、これ等の物は各、特殊の利用を有つものである。従つて一

の再生産し得ざる物の價值關係の計量に於いては、この特殊の利用の量が何程なるか、決定せられなければならない。従つてその價值關係が實現せられるためには、若しこれ等の物が失はれた場合に於いて無くなる質的に異なる種類の利用の分量が相互に考量せられなければならないのである。こゝに於いてディーチエルは、再生産し得ざる物に於いて失はれる利用の測度は物自體の利用の多しさによつて測定せられるものである、この法則に到達したのである。

要するにディーチエルは費用の要因を主觀化し、これを利用に對立せしめ、兩者の差額の有無によりて再生産し得る物と再生産し得ざる物とを區別し、前者は再生産費の大いさ、即ち手段利用の大いさによつて決定せられるものであるが、後者はその物自體の特殊の利用によつて決定せられるものであるとなしてゐるのである。かくして價值は費用と利用の調和より現はれるものであるとなす點に於いて、彼は兩者の同一化を學問的に説明せんとしたる學者である。

(以上は關係箇所の引用以外に Diezel, a. a. O., SS. 291-7 參照)

四

價值論上に於ける主觀論と客觀論の分岐、又これより生ずる幾多の傾向の對立の結果、生ずる價值論上の錯綜は價值現象の組織的説明に對して幾多の障害を生ずるものとなして、所謂價值無用論 Die sterbende Wertheorie を主張する一派の論者を喚起するに到つたのである。例

へばゴットワルの經濟的容量論 Wirtschaftliche Dimension カッセルの稀少性原理 Seltenheitsprinzip 又はリーフマンの利用と費用の比較 Nutzen- und Kostenvergleich それである。以下、これ等の學説が吾々の主張する利用の内容は費用によつて決定せられ、費用の内容も亦利用によりて決定せられるとなす、利用と費用の合一化に對して如何なる關係を保つものであるかを説明して見たいと思ふのである。

先づゴットワルは從來の價值理論が必ずしも價值現象に屬する個々の問題を誤りに導くものではないが、それは單に經濟學に關する典型の場合 ein typische Fall を説明したるものに外ならざる理由によりて、此の從來の價值理論を排斥して、更に一般的にして現實に適合する理論を以つて之れに置換へんとしたのである。彼の價值論に對する獨自の立場は、既にその著「價值の思索」Der Wertgebäude, ein verhluttes Dogma der Nationalökonomie (Kritische Studien zur Selbstbestimmung des Forschers in Bereiche der sog. Wertlehre, Jena 1897) 及び「言葉の支配」Die Herrschaft des Wortes (Untersuchungen zur Kritik des nationalökonomischen Denkens, Jena 1901) に於いて發表せられ、從來の價值論に對して抗爭的態度を示してゐるのである。古典經濟學より現在に到るまで經濟理論の論述方法は著しく言葉に囚はれてゐるものであり、現實なる經濟生

活への接觸と人の共同生活の實在を逸したるものである。彼は「言葉の自由」[Freiheit vom Worte (über das Verhältnis einer Allwirtschaftslehre zur Soziologie, 1923)] に於いて、これに關する一般的論陣を張つたのである。彼は從來の價值理論の基礎概念を修正せんとしたるものではなく、その基礎的包括範圍の修正を試みんとしたのである。即ち彼によれば從來の理論經濟學は所謂「物財の幸福」[Güterseligkeit] 即ち個々の財に關する諸考察乃至は財に對する各個經濟主體の立場に囚はれ過ぎたものであるとなされてゐるのである。經濟理論が單に營利經濟及び營利經濟的なるものに立脚してゐると見ることは餘りに偏頗である。古典經濟學を觀するに經濟生活は何人も貨幣、土地、或は勞力を以つて自由に出入し得る市場の如き觀があるが、かく經濟生活を觀察することは偏つてゐるのである。かくして從來の經濟學は自然科學研究の様式に倣つて、國民經濟の法則に到達してゐるのであるが、この法則を取扱ふ國民經濟理論は各種の問題に直面することを忘れて單純に概念上の解決論を恣にしてゐるのである。こゝに於てゴットウルは單に個々の財に對する各個主體の關係論を離れて、その着眼を現實なる經濟生活の全體に轉じて、彼の所謂經濟的容量論 Die Wirtschaftliche Dimension に到達してゐるのである。先づ彼は、價值は個々の財が經濟生活に對する關係より導かれて來るものではなく、又價值の測度は快と不快の感覺の大いさ、若しくは技術的費用によりて見出されるものではなく、これ等

は廣く經濟生活の全體に基づいて定められるものとなしたのである。然し彼は價值の内容を否認するものではなく、唯、此の價值が導き出される論理的立點を批判したのである。即ち、自在的目的物の外界に關する形而上學乃至は理論上の *Güterseite* より離れて、現實を捕捉し經濟生活の全體にその觀察を投ずることが、彼によりて方法論的に説明せられてゐるのである。交換はこれに参加する人の集團の全體的關係を喚起することなくして行はれるものではない。故にこの經濟に關し全體に對する觀察より、而かも全體に對する關係の考慮より、果して交換を行ふべきか、又如何なる分量に於いて交換を行ふべきかの決定が導かれるものである。此の點は主觀價值理論が個人より出發して、個々の財の利用の諸關係を捕捉し、又古典價值理論が個々の財に投せられる勞働の費出を捕捉して、共に價值の説明の理論的基礎を得んとする點と比較すれば、その立脚點に著しき相異の存することを認め得るのである。即ちゴットワルは、經濟者は財に於いて思慮するものではなく、形勢に於いて思索し、彼が凡てのものを決定するは「全體に對する關係」*Zusammenhang zum Ganzen* によるものであるとなし、經濟者の決定は「集團内に於ける凡ての現象の最生活促進的の相互作用」*Das lebensforderlichste Zusammenspiel aller Erscheinungen im Gebilde* によりて定まるものであるとなしてゐる。かくして一つの目的物の價值秤量は、一の主體より見れば、單に經濟者としての行爲の附加的反映であつて、反對にその行爲は單に價值秤量

の反動ではない。交換並に價格を決定するものは、常に經濟の計畫である。處分し得る財を欲望に組織的に配分することは少くともこの欲望が交換過程に於いて充足せられるものである限りは、その達成の相互作用が問題になるのであつて個々の財の達成が問題となるのではない。従つて上記の配分、即ち財の欲望に對する關係は、個々の目的物に對して一定の關係に置くことは出来ないのである。これ從來の價值理論に抗爭するゴットウルの獨自の理論的立場である。

經濟行為の凡ての目的物——財と名附くも、又その他の名稱を以つてする場合もあるが——或る特殊の經濟的容量を表示するものである。凡てこれ等の目的物に對しては、それが經濟一般に對して有する關係によりて「認められたる大いさを表示する特質的數量」*eine charakterische Zahl im Sinne einer geltenden Grösse* が附着してゐるものである。かくしてゴットウルは「經濟的容量は或る場合には特定物として——テーゲルの領土——或る場合には種類の一例として——四歳の農馬——或る場合には數量の單位として——噸の鐵、一米の布——目的物に對し關連を保つものである」と述べてゐる。^{Gothl. a. a. O., S. 17.} ゴットウルはこの經濟的容量の概念を從來の經濟價值理論若しくはその價格理論が蒙りたる困亂を惹起しないために、價值若しくは價格と名附けてゐない。「人は紛糾を免れないであらう、それ故にこの新語がある」^{Gothl. a. a. O., S. 18.} 然しながら彼に於いては從來の如く等しく價值に相當すべきもの即ち、上記の經濟的容量の意義が價格のそれより明確に區

別せられてゐるのである。即ち經濟的容量、即ち目的物の特質的數量以外に價格なるものが獨立の存在を保持してゐることが認容せられてゐるのである。一の過程、Vorgang が存在し、この過程自體が大いさを保つ定量に於いて現はれるものであるから、それは異なる種類の確定せる分量のその時々との連鎖に導かれることが、經濟の領域に於いては多種の様式に於いて起る。この時によりて異なる分量の連鎖より、又時によつて異なる「組合せ」Parung が現はれるものである。價格はこの交換に於ける組合せ分量の時々の変化、即ちその割合に歸着するものである。この意味に於いて、ゴットゥルに從へば、所謂經濟的容量は價格の基礎をなすものであり、これを從來と異なる意味に於いて價值なる名稱を附するも敢へて不可なき譯である。唯、彼は從來の價值理論を批判し、これを認容せざる意味に於いて價值なる名稱を斥けてゐるに止まるのである。反之、價格の場合に於いては上述の如く時々變化する組合せ分量の關係に就いて、如何に此の關係が現實に行はれる交換過程そのものと並立して行はれるか、窺はれるのである。かくしてゴットゥルは價格の本性を、例へば主觀價值學說の價格論の如きに比しより現實に接近せしめんと努めてゐるのである。尤も日常生活、若しくは經濟理論が日常の價格、その騰落、或は價格の一般現象に關し述べる場合に於いて、經濟的容量、即ち價值の概念がその根柢をなすことを認める點に於いては、ゴットゥルも亦從來の學說と其の揆を同じうするものである。然ら

ば經濟的容量の概念は彼により如何に價格より區別せられてゐるか。

價格は過去に於いて實現せられたものである。經濟的容量は一の持續狀態を示すものであり、一目的物の特質的數量として認められる何ものかである。經濟的容量は價格に歸着し、その後に於ける交換過程に對して決定的のものである。然るに價格は個人的のものであり、それは事實に依存しこの事實は必然的に價格決定を內在する交換を決心せる人に依存してゐるものである。この意味に於いてゴットワルは價格は個人的のものであるとの通説に反する推論を敢へてしたのである。經濟的容量は個人を脱却せる或る非個人的のものであつて「過去の存在」Das Gewesene に依存するものではなく、「通用」Das Geltende に依存するものである。即ち、經濟的容量は價格に關する根據ある豫測であり、價格の豫望であり、市場價格——よし此の價格は所謂公正價格 gerechter Preis には關係なくして單に交換取引より生ずるものとしても——に對する一の要求を包容してゐるものである。かくして經濟的容量は、ゴットワルに従へば、凡ての秤量の準繩をなし、經濟に於ける凡ての計量の要目を形づくるものである。而して經濟的容量は目的物に對する價格の傳統であり、價格の常時的地位をなすものである。かくしてそれは過去の價格の支持者として存在し、將來の價格に對しても一定の支持力を發揮するものである。價格の過去より價格の將來を連結する橋渡しは又これである。經濟的容量はその發現を市場に求

め、凡ての市場は一般に經濟的容量の創設者として、その現狀を維持してゐるものである。詰り、價格によりて決定せられ、又同時に價格を決定するものが取りも直はさず此の經濟的容量の意義である。

上記の立場よりゴットゥルは限界利用理論に反對の態度を持してゐるのである。彼はこの理論に反對して、限界利用學説はその凡ての適用を以つてするも、利用が如何にして所與の場合の稀少性により、より高き厚生關係として價值への上進を得るものであるかの單に純化せられたる所論に外ならないのである、と述べてゐる。此の場合に於いて價值は任意に定められたる標準に従つて、人が豫め確定せる利用の大いさを定めたる範圍に於いてのみ「確定の大いさ」となつて生づるものである。然るに價值の大いさを確實に知らんとする意思是、此の利用を公言し、利用の大いさに就いて知悉せりと自信してゐる人よりも全く此の利用そのものに就いてより多くを知らざる者に於いて、却つて顯著に現はれて來るのである。交換に當り大さの作用を分明にするため何事かを表示せんとする場合は常に、人はその言葉と敘述に於いて豊富である。O. S. 113. 上記ゴットゥルの限界利用學説に對する批評は價值の説明を個人に幽閉し、若しくは個々の財に局踏して生ずる利用より説明することを以つて不充分となし、従つて價值の説明を經濟生活の現實性と一般性よりなさんとする獨自の立場を表示してゐるもので

ある。然しながら此の批評は必ずしも正當ではないのである、以下、簡単にこの點に結び付けてゴットゥルの經濟的容量の理論を批評して見たいと思ふのである。

現在の經濟生活に於いて一の個人經濟が全く經濟一般を離れて自在し得ざることは勿論であり、従つて價值論の出發點も此の閉されたる個人經濟を出發點として樹立せられんとする場合に於いては、それはゴットゥルの述べるが如く現實性を缺きたる而かも一般性を有せざる價值論に墮するであらう。然しながらゴットゥルが價值理論の立脚點として主張する經濟の全體を取入れる場合に於いて、果して利用は費用を決定し、費用は利用を決定し、兩者の合一に價值の成立を認めんとする學說がその成立の可能を有せざると斷することは出来ようか。上記の如くゴットゥルは限界利用學說を批評してこの學說は利用に就きて知らざるものが却つてその價值を正確に知らんとする場合には矛盾するものゝ如く見てゐるのであるが、價值を正確に知り、又これを正確に測定せんとすることは豫め何等かの意義に於けるその利用を知り且つ之を測定することなくして行はれるものではない。若し一の財がその所有者に對して直接その利用を生ぜず、従つてその所有者は自己に對する直接の利用を知らざる場合に於いても財がゴットゥルの所謂經濟的容量を保持してゐる限りは何等かの意味に於いて此の所有者に對して利用の概念が現はれて、それが價值決定の基礎をなすものである。ゴットゥルの經濟的容量は或は彼により

て非個人的のものであると言はれ、或は持続的なものであると説明せられてゐるのであるが、それは單に物自體の性質を表示してゐるのに過ぎない。此の物自體の性質が如何に一般的に認められ、その性質のまゝに適用するものとしても、これのみによりて價值は到底實現せられるものではない。又物自體の性質は價值ではない、斯くの如くして物自體の性質の表示たるゴットハルの經濟的容量は價格を導く動力とはならないのである。價格は常に變動する特性を有するものであるが、此の變動は目的物の本質的數量たる經濟的容量によりて動因を與へられるのではない。それはこの經濟的容量は實はゴットハルの言へるが如く持続的のものであるからである。此の持續狀態に對する人の利用秤量が如何に變化し、而かも此の變化は唯一個人に制限せられるものではなく、經濟社會に於ける凡ての人に現はれ、又一人の利用秤量が他の人の利用秤量の内容に影響し、かくして多數の利用秤量が相互的に影響する意味に於いて換言すれば利用なる概念にゴットハルの經濟の全體の意義が包含せられる場合に於いて利用が價值を決定し、價值秤量の社會的調和が價格を成立せしめるものであるとなす見解が正しく支持せられることゝなる。限界利用學說が利用を以つて價值決定の要因となす場合に於いては、此の利用は廣く經濟全體を根柢としてその反映として一經濟主體の内面に成立したる利用と解すべきであつて、かく利用を廣く解する場合に於いて、上記ゴットハルの限界利用學說に對する批評は必ずしも正

鵠を得たるものに非ざることを認ることが出来るのである。

カッセルも亦從來の價值理論に對抗してその無用なることを力説したのである。價值は財の相對的な經濟的意義であるとせられてゐるのであるが、此の意義に對して算術的な測度が缺けてゐるために自ら價值の概念は不明確となつてゐるのである。即ち、價值は算術的に表示せられたる大いさの概念の嚴密さを缺いてゐるために、それに對して共同なる呼稱を與へることなくして價值理論を基礎づけんとする試みは大なる困難に逢着してゐるのである。かくの如き共同なる呼稱は當然貨幣を前提とするものなるが故に價值は價格により、又價值秤量は貨幣による秤量によつて置き代へられなければならない。こゝに於いて價值理論は全く經濟學より除外せられなければならない。先づ交換經濟に關する理論的説明は最初より貨幣に結び付けて考へられなければならないのであつて、従つてその本質に於いて一の價格理論をなすものである。かく考ふる場合に於いて理論の著しき單純化が達成せられ、從來多くの學問的努力が空しく投せられたる多數の論争問題を避けることが出来るのみならず、理論經濟學をしてスコラステイックの不明に墮せしめる事を防止することが出来るのである。此の經濟理論の單純化は學問的努力を經濟理論に關する實際的にして重要なる方面に注がんとする場合に於いてその必要が

起るものである。G. Cassel, Theoretische Sozialökonomie. 1923. S. 41. 此の理論の單純化の見地よりカッセルは主觀價值理論に對しても客觀價值理論に對しても反對の態度を示して「價格を單に客觀的若しくは主觀的決定要因に歸結せんとする理論の意味に於ける客觀價值學說又は主觀價值學說はそれ故に無意義である。文獻に於いて異常に大なる地位を占めてゐるこれ等兩理論の凡ての論争は單に無益に失はれた努力である。」^{10, S. 122.} Cassel, a. a.

かくしてカッセルは價值理論に價格理論の代置せらるべき事を主張したのである。勤勞及び生産物の恒常的・組織的交換によつて一般に社會に於ける全員の多少不充分であるにせよ一定の欲望充足が可能となるものである。此の見地より總體經濟は一の社會經濟と呼ばれ、又交換の基礎的意義を強調する場合に於いては一の交換經濟と呼び得るのである。一國民のかゝる經濟を特に一の單位として強調する場合に於いては、これは國民經濟と呼ばれてゐる。交換が行はれる場合に於いては交換せられる二つの物に與へられ得る大いさの判斷に對する要求が起るものである。即ち、二つの財の秤量が行はれる。此の秤量は凡ての財が同一の財による秤量を受ける慣習が生じた場合に於いて著しく單純化せられるものである。此の慣習は交換そのものの慣習と同時に形成せられたものである。吾々は少くとも一の交換經濟を認め得る程に交換の意義が一般化した場合に於いては、一の共同財を以つて凡ての財を秤量する慣習が行はれてゐる

のである。かくてカッセルは一般に交換經濟は貨幣經濟であるとなしたのである。Cassel, a. a. O., S. 37, 39.

凡ての經濟は、カッセルに従へば「稀少の原理」Prinzip der Knappheit によりて支配せられるものである。交換經濟も亦此の原理によつて支配せられるのであつて、價格の壓力によつて消費を比較的稀少なる財の供給と調和せしめる必要を意味してゐるのである。價格の社會經濟的必要を齎らす此の原理の中に、吾々は價格決定の一般的・本質的な基礎を認めるのである。かくして此の原理は價格理論に對して根本的な重要性を保持するが故に又經濟理論の全體に對しても重要な意義を有つものである。吾々の現實なる經濟的秩序の下に於いては多數個人の財の供給に對する多數の需要はその需要せられる凡ての財に價格を附することによつて調節せられるものである。即ち、これ等の價格はかくして財の引取りが行はれない前に支拂はれるものである。多數の個人の所有する貨幣の源泉は自から制限せられて居るのであるから、上記の價格の決定は多數の個人をして一方面若しくは他方面の消費を制限せしめ、從つて彼等が費出する貨幣額はその欲望の出来るだけ均等なる満足を與ふる事となるのである。若し價格が充分高き場合に於いては多數消費者の需要は各方面に於いて制限せられ、現に消費に充當せられる各種の現存の供給によつて充されるものである。此の消費者の各需要の制限は詰り價格決定の作用となつて現はれるのである。即ち交換經濟に屬する諸財に對する消費者の競争は單に

適當なる價格決定によりてのみ調節せられるものである。此の現存價格の決定による消費者の需要の制限は各個人の消費に對して出来るだけ大なる自由選擇の餘地を與ふことを意味するものである。Casel, a. a. O., S. 62.

カッセルは現存せる價格を前提とする稀少性原理より出發して需要の伸縮性を是認してゐるのである。即ち、需要の伸縮性は僅少なる價格の變動による需要の變動によりて測定せられるものである。一の欲望が飽滿の點に達した場合に於いては此の伸縮性は零となる。即ち、價格が僅か低落しても少しく需要の増加を生ずるものではない。又價格が個人に取つて到底商品を獲得することが出来ない程度に高くなるときは又此の需要の伸縮性が零となる。従つて價格が僅かに低下しただけでは、これに需要の増加を導くものではない。欲望の一部が充足せられるときは價格の低落がこれに應ずる需要の増加を生ずる場合がある。又この需要の増加が價格の低落に比して大なる場合と小なる場合がある。これに應ずる需要の増加を生ずる場合に於いては需要の伸縮性は一であり、これより大なる需要の増加を生ずる場合に於いては需要の伸縮性は一以上であり、これより小なる需要の増加を生ずる場合に於いてはその伸縮性は一以下である。Casel, a. a. O., S. 66. 一の需要の伸縮性は價格の變動が需要の變動を生ずるものなることに想到せしめるものである。此の需要の變動の傾向は價格に對する反動であり、即ち高き價格は需要の減少

を低き價格は需要の増加を生ずるものである。此の需要の變動の價格に對して有する反動が一度達成せられたる價格の平衡狀態の安定に對して必要な前提をなすことは自ら明かである。

カッセルは現存價格に於ける一定の需要狀態を捕捉して、その範圍に於ける價格理論を説述し、これが從來の價值理論に代置せられることによつて經濟理論の單純化を企てんとしたのである。各財に對する需要はこの財の價格が確定せられると同時に定まるものであるとの事實だけを以つて價格の問題の解決に對しては充分なる根據が與へられてゐる譯である。従つて價格の問題に關しては、これ以上需要を分析する必要はない。一定の價格に於ける需要の範圍は數量的算術的性質を有する具體的事實である。需要は此の形式に於いて經濟學にその礎石として直接用ゐられ得るのである。此の具體的事實としての需要の根柢に横はる心理的過程はこれを知ることは價格が需要に及ぼす影響を正當に判斷するに資する範圍に於いてのみ理論經濟學上の興味を有つに過ぎないものである。この心理的過程は少くともそれが明かにせられる範圍に於ては如上の見地よりせられなければならないのである。唯、然しながらかくの如き心理過程の研究は固有なる經濟理論の範圍に屬しないものである。O. S. G.

この見地よりカッセルは限界利用學說の批評に移つてゐるのである。この學說は需要に關する心理を抽象的・算術的形式に無理に當て嵌めんとし、即ち欲望充足より生ずる利用が算術的

に秤量せられるものであると考へてゐる。即ち、一の欲望が連續せる等しき用量を以つて充足せられる場合に於いては、これに該當する全部利用は増加するのであるが、その増加は漸次延し、全部利用に對する最後の増加量、即ち限界利用は漸次僅少となるものである。一定の平衡状態に於いては限界利用は欲望充足の最後の用量に支拂はれたる價格に一致するものである。限界利用學說の考察に従へば、これが各の經濟的活動を支配するものである。若し利用が貨幣によりて秤量せられる場合に於いては限界利用は最後の用量の價格に等しくなるものである。欲望の凡ての部門に於いて、かく限界利用と價格とが一致することは最大の全部利用が獲得せられることを意味するものである。若し一の欲望の部門に於いて限界利用より大なる價格が支拂はれてゐる場合に於いては、此の超過せる支拂價格は他の欲望部門に充當せらるべき筈のものであり、これが過度に支拂はれた欲望の部門に於いて獲得する利用は當然支拂はるべき欲望部門に於いて獲得せられる利用より僅少なるが故に、上記の場合に於いては一定の利用損失が起るものである。かくして限界利用の全理論は經濟主體が全部利用の最大限を目標とするこの前提に築上せられてゐるものである。カッセルはかく全部利用の最大限の目標より導かれる需要の性質の説明は稚氣に類する業であり、人爲的な理論構成と現實の曲折なくしてこれを企てることは不可能であるとなしてゐる。彼の見る所は現實なる價格の前提の下に於ける

需要の變化である。従つてこの見地より彼は次の數項に分ちて、限界利用學說を批評してゐるのである。

一、凡ての欲望の部門に於いて、その滿足の各階段に於ける利用の抽象的秤量は——如何なる計算の標準に基づくも——經濟人に取つて不可能である。かくの如き秤量に對しては少くとも現實なる價格狀態の支持を必要とするものであり、彼が一定の確率性を以つて判斷し得ることは、一の價格の變動によりて惹起せられる需要の變化である。彼の秤量の標準の全體は現存する價格狀態に關連するものである。吾々が此の單なる事實を固持する限り、經濟人は凡ての價格が與へられた場合に、その購買せんとする物を決定するものである。即ち、その満足せんとする欲望と敢て顧慮を廻らさざる欲望との間に限界を區劃せんとするものである。經濟學はこれ以上遡つて問題に携はる必要はない。かくてカッセルは價格現存の見地より單に充足せられる欲望と然らざる欲望とを區別してゐるのである。

二、限界利用が價格に一致するものであるとなす原理は必ずしも一般的に妥當するものではない。即ち、欲望が各用量により充足せられる場合に最後に充用せられた用量は價格と同じ秤量を受けるものではない。普通飽滿に到るまで充足せられる財の欲望に關しては最後の用量の利用はその價格より高く秤量せられ、この事實は此の欲望は稍、この價格が高くなる場合に於

いても充足せられ、之れはその財の伸縮性が零であることによりて表明せられる。欲望充足の異なる階段は限界利用理論が前提してゐるが如く常に連續せる系列を形づくるものではない……こゝに於いて限界利用概念の基礎に基づいて方式化せられたる單獨經濟の均等なる欲望充足の問題の解決は必ずしも正當ではない。若し、吾々が欲望の秤量に關して述べんとする場合に於いては、單に次の原則に満足しなければならぬのである。即ち「現存の價格狀態に於いては欲望を充足の價格より低く秤量せられる各欲望はその充足よる除外せられ、少くともその價格と同様に秤量せられる自餘の欲望が充足せられるものである」こと之れである。

三、大なる交換經濟に屬する多數の單獨經濟を考察する場合に於いて、各少量宛販賣せられ一般的需要の目的物たる財は、その財の價格に一致する一、の限界利用を生づるものであると主張することは完全なる確實性を有つものである。多くの購買者の中には、その財の一の單位用量がその價格と同じ價值のものであると考へる者がある。かくの如き購買者は通常、限界購買者、Grenzkäufer と名附けられてゐる。かゝる限界的需要が存する限り、凡ての欲望充足の部門に於いて限界利用と價格の割合は同一であるとなすことは多少正當なる意味を有つものであるにせよ、この原理が全交換經濟に屬する均等なる欲望充足の問題を解決するものであると見ることは多少制約して考へ得るに過ぎない。此の方式は價格成立の欲望充足に及ぼす必然的な

る制限作用の方式に比して、直接の明確さを缺いてゐる。即ち經濟が欲望充足上、その價格を支拂はんとしてゐる欲望は充足せられ、その他の欲望は充足されないものであるとなす方式に比すべき明確さを有つてゐないのである。かくしてカッセルは限界利用の概念は、よしこの言葉を用ゐることは屢、便利であるとか考へられるにしても、必ずしも特殊的なる貢獻とは認められないとなし、これを價格又は價值決定の原因となし全經濟理論の基礎となすことは支持せられないものであると述べてゐるのである。稀少性の原理によれば需要が現存する財の供給量によつて充足せられ得る様に需要そのものを制限することをその任務となすものである。即ち、一財に對する需要はその價格によりて切斷せられるものである。此の意味に於いて最後に充足せられる欲望の重要さは價格に等しいものであるが、これは「その重要さが價格を決定するものである」との命題を意味することゝはならない。事實は全くこれに反し、價格は充足せられる欲望の範圍を決定し、又價格が最終欲望、即ち限界欲望の果して如何なるものであるかを決定するものである。詰り、價格の決定せられるのは需要が現存する財の量によりて充足せられる限度まで減少せられる條件に依存してゐるものである。かくしてカッセルは、所謂限界利用學說を價格成立の問題、乃至は價值問題を解決するものであると認める企ては無條件に斥けられなければならないものであるとなしてゐるのである。

四、限界利用論者はその欲望の意義を單に抽象的に或は現存の價格狀態を考慮することなくして、貨幣を以つて秤量せられ得るものとしてゐる。この抽象的な貨幣秤量は、かく抽象的に測定せられた欲望の意義をその欲望充足のために現實に支拂はれた價格と比較することゝ導いたのであり、若し前者の重要さが後者よりも大なる場合に於いてはその兩者の差額を消費者の收益と見る考へを惹起するに到つたのである。此の收益、Gewinn oder Überschuss 即ちマーシャルの消費者餘剰 Consumer's Surplus は、若し消費者がより低廉なる價格を以つて獲得し得ざる場合に於いては敢へてその財に對し支拂ふことを躊躇せざるとの假定に立つ最高價格と現實支拂價格との差額である。一の價格は假定に立ち他の價格は現實に立つてゐる。この兩者の立場の相異に對して、カッセルは次の如く批評してゐるのである。「諸財の秤量は一定の價格狀態——現實なる——に對し本質的に關連するものである。而してそれは一定の價格狀態に於いて何が消費せられるかゞ決定せられる歸結に外ならない。即ち、財が秤量せられる貨幣の測度は確定せる價格狀態に於いてのみ確定せる意義を有するものである。全く異なる二つの價格狀態が考察せられる場合に於いては一財の秤量は二つの場合に於いて異なる貨幣の測度によつて表示せられることゝなり、従つて直接比較され得るものではない。尤もその財の價格の變動が僅少であつて、これがその經濟の組立に取るに足らざる單なる役目を果すものと考ふる場合に於いては、

上記二つの場合に於ける貨幣測度の差異は等しく少いのである。然し所謂消費者餘剰に關する嚴密なる定義が不可能であることは明らかである」Cassel, a. a. O., S. 71.

以上はカッセルの限界利用學說に對する批評を述べたのであるが、その批評の根柢をなす見解は各個人の需要は現存の價格により影響を受けるものであるとなす點にある。此の點は限界利用學說が欲望充足の度合、即ち利用の概念より出發してその價格の立成を解かんとする立場と相異するものである。一は價格の現存を前提とし、他はかくの如き價格が如何に現存するに到るかを解かんとするものである。而してこのカッセルの獨自の見解は彼の稀少原理に準據するものである。稀少性の原理は無限に多數の欲望の中で、その一定數が選ばれて充足せられるものであるとの「欲望の一定の制限」をその根柢に置くものである。自立せる自己經濟に於いては、この欲望の所要なる分類は一の統一的意思によつて達成せられるものである。然るに全交換經濟の欲望全體の分類に對してはかくの如き統一的立場が存在してゐないのである。従つて二つの欲望が異なる單獨經濟に屬する場合に於いて一の欲望の意義と他の欲望の意義との比較は如何にして可能であるかの問題に對し、カッセルは凡ての異なる欲望の意義に對する共通的測度 *Allgemeinsame Massstab* を前提としてゐる。即ち交換經濟は同一の性質の凡ての財に對しては單一なる價格が與へられるものであるとの事實に基づいて、此の共通測度を獲得するのである。單一

の價格が全交換經濟に於ける各人の異なる欲望を比較し得る共通の測度となつた場合に於いては、次の事が起るのである。即ち「現存の價格の支拂はれる欲望は常にこの價格が支拂はれざる欲望に比して重要なものと認められる。従つて交換經濟は異なる欲望の重要性をその充足に對して與へられる貨幣額によつて測定するものである」^{之である}。(以上 G. Cassel, Ibid., SS. 68—72 參照)

以上カッセルの價值無用論を説明したのである。先づ交換經濟社會には常に壓力としての價格が存在し、これによりて需要が供給に對して一定の調和を保つものであるとなす見解は交換經濟に屬する凡ての單獨經濟が悉く異なる經濟的條件を有し、従つて又異なる秤量をなすに拘らず、常に一定の時に於いては同一の財に對しては唯、一つの價格によりて支配せられる經驗的事實によりて容易に證明せられる所である。従つてカッセルが財の秤量は現存價格を前提としてのみ確實に實現せられるものであるとなす見解は又吾々によりて容認せられるのである。然しながら價格理論の主要任務は果してカッセルの力説するが如く、單に一價格が成立し、これに對して需要も供給も一定の調和を保つ狀態、即ち交換經濟に於ける平衡を敘述することであり、果して如何にして此の平衡が達成せられるかの過程の説明はこれを除外するも何等差支なきものと斷定し得るであらうか。此の點はカッセルの價值理論に代置せられた價格理論に對し吾々の抱く一つの疑問であり、これが解決せられなければ吾々はカッセルのなしたる如く限界

利用學說を無意義なりとして容易に斥けることは出來ないのである。尤も、カッセルは價格成立の要素として主觀的のものと客觀的なるものを認め、前者は生産手段の分量であり、一の技術的係數を形づくるものであり、他は需要が價格に對する依存關係である。O. S. 1922. 又カッセルは「その價格理論に於ける生産手段の價格、即ち生産費に關して各時期に於ける各種の生産手段に對する連續的な消費の間接に保有する需要がその時期に於ける生産手段の現存分量によつて充され、生産手段の價格は需要を此の狀態に調和せしめる程度の高さを示すものである」と述べてゐる。即ち、彼は生産手段の價格がこれに對する消費者の間接需要に對するその稀少性によりて定まるものであるとなしてゐるのである。需要と供給が平衡し、生産物の價格が確定して、此の平衡を維持し、此の平衡に於いては生産手段の價格も一定の調和を保つとなすことがカッセルの價格理論の中心思想である。

勿論、現在の經濟生活が價格中心の生活である限り、此の經濟生活自體は交換經濟的な價格の支配を免がれることは出來ないのである。吾々日常生活に於ける經濟的秤量が現存せる價格を基礎として行はれることも事實である。交換經濟は無數の單獨經濟の集積として現はれる。交換經濟に於いて行はれる一の價格に對して各個の單獨經濟は常に不變なる秤量關係を固持するものではない。又カッセルの力説するが如く利用秤量は現存價格に對して相對的の意

義を有するものであるが、此の秤量が、現存價格の變動なきに拘らず、それ自體に於いて、一の變動體であることも認めなければならぬ。而して此の秤量が若し現存價格に固定し、不變體として存在する場合に於いては如何なる意味を以つてするも——カッセルの需要の伸縮性を以つてするも——價格の變動は行はれないのである。故に既に述べたるカッセルの限界利用學說に對する多くの批評は悉く的中せざるものと斷することは出来ないにしても、限界利用は價格と同じく可變體なるが故に、詳言すれば價格が變動するに應じて變動するものなるが故に、價格決定の要因に非ずとせず一點は必ずしも正鵠を得たる所論ではないのである。限界利用は現存の價格に調和して現はれるものであるが、又將來の異なりたる價格を導く基礎をなすそれ自體に於いて一の獨立せる可變體である。

カッセルが限界利用を以つて現存價格に相對的なものであるものであり、これに相應して達成せられるものであるとなす見解は一の重要な着眼を吾人に暗示するものである。既に述べたる如く、一の單獨經濟に於いて一財の最終用量に對し支拂はるゝ價格はその利用、即ち限界利用と均等するものである。此の限界利用がカッセルの主張するが如く、現存價格の前提の下に達成せられることは、此の限界利用の達成は費用として現存價格に基づく一定の支出を意味するものである。吾人の經濟的活動はカッセルの認めるが如く獲得せられる限界利用が支拂はれる價格、

即ち費用より小なる場合に於いて實現せられるのではなく、反對に少くとも此の價格に相應する限界利用が獲得せられる場合に於いて達成せられるのである。かくして得られる利用は必ず捨てゝる費用と現存價格に基づき比較考慮せられるものである。此の現存價格に基づく比較考慮なくして經濟的活動は起るものではない。こゝに於いて得る利用の程度は投ずる費用の多少によつて決定せられ、投ずる費用の程度は得る利用の多少によつて又決定せられる。如何にして一定の所得により、兩者を有利に結合せしめるか、吾人の經濟活動の目標をなすものである。而して此の經濟活動が實現せられる終局の限界は此の利用と費用の合一點である。價值は此の合一點に於いて成立し、カッセルが限界利用を現存價格に對し相對的のものであるとなしてゐる點は利用と費用の合一化を暗示する意味に於いてのみ一の卓見を意味するのである。然し現存價格に基づく費用に對して、利用はそれ自體に不變體であり、價格決定の要因をなさざるものとなす彼の見解は單に交換經濟の平衡關係のみを觀察して、此の關係が如何にして達成せられるかの過程を度外視したものである。

ロバート・リーフマンも從來の價值理論、殊に限界利用學說を斥けてこれに對し利用と費用の比較 *Vergleichung von Nutzen und Kosten* に經濟の本質を認めんとしたのである。彼の價值無

用論はかくして利用と費用の對立によりて、その根據が與へられる譯である。

リーフマンが從來の經濟理論に對して投じたる非難の標的は、それが經濟現象の本質に關し誤れる觀察をなし、これがために交換流通の機構を組織的に説明し得ざるとなすことにある。

即ち、從來の經濟理論に従へば、經濟とは外的自然の對象に對する人の關係であるに對し、リーフマンによれば經濟は心理的のものであり、或る特殊の計慮であり、一の處理であり、その本質は此の經濟が關連してゐる對象によりて定められるものではない。從來の經濟の本質に關する見解は技術的・物質的なものであつて、これに準據する場合に於いては當然經濟と技術の混同を生じ、又經濟と生産の混同が經濟學の全體系を貫流することとなる。かくして經濟は財の獲得の行爲となり、經濟學の基本概念は財の概念となつて、此の學問は財學 *Güterlehre* に墮することとなるのである。若しヘルマンの如く經濟學は財に關連し、財量論 *Grossenlehre der Güter* となすときは、經濟の内容はその目的物、即ち外的自然の對象によりて定義せられることとなる。此の場合に於いて果して經濟に關する定義が非物質財を包括せられるか否かは初めから問題とされて居らない。何んとなれば、上記の技術的・物質的理論に従へば凡ての價格と所得とは通常數量的に財の分量と見られ、貨幣の額は財の分量と同視せられるからである。然し貨幣收益が財の分量以外にその源泉を有つてゐるものである限り、之れは不可能である。かく

してリーフマンは先づビュヒャーの經濟に關する見解を斥けてゐる。ビュヒャーは「凡ての經濟は人類が外的世界に對する關係から起るものである（自然と人類）。人類はその存在の維持と自己の連續的發展のために此の外的自然を必要とし、自然が彼等の目的に對し、その處分に委たる資料の分量は常に定限である、多くの資料は自然が附與する狀態に對して使用せられるものではなく、一の變形を必要とする。此の二つの事情は、物の蓄積量が人の數の増加と共に現存の需要に對し不調和を生づる意味に於いて經濟を導くものである。制限の下に處分し得る物、若しくはそれを人類の目的に適合するためには勞苦を喚起する物を以つて人は經濟してゐるのである」となしてゐるのであるが、これはリーフマンによれば、一の技術的・物質的經濟觀である。又リーフマンによればヴキーザー、モンツェルト、ゴットウル等もこの經濟觀の誤謬に陷るものであり、殊にフキリツポビツチが「人類の生活は恒常的にして常に更新せられる自然の對象の使用を必要とするものである。故に、その活動が具體的・物質的財の獲得に向けられ、これを使用し、消費しなければ最も單純なる人間の生活も最も高尚な生活も、最も低き文化階段も、最も高き文化階段も考慮せられるものではない。……人類生活の此の側面は吾人の經濟的と名付けるものである。故に經濟の概念は物財を以つて人間に對する持續的供給に向けられる凡ての過程と制度と此の財の消費を包括してゐるものである」となしてゐる點は、最も赤

裸々にリーフマンの非難する技術的・物質的經濟理論に陥入れるものである。リーフマンによれば、かくの如き經濟に關する見解は不可能であり、且つ廣汎に失するものである。何故なれば、これによれば一般に經濟がなければ生活も存在せざることとなり、かくして動物も亦經濟を營むこととなるからである。こゝに於いて經濟を生活の配慮と定義することは不可能となる。故に屢々經濟なる概念に「計畫的」なる言葉を附加して、その本質を明かにすることが行はれてゐるのであるが、かくする場合に於いては日常生活に於いて經濟と名附けられるものに多少接近するのであるが、未だ以つて各個の經濟に於いて如何なる點に、此の「計畫的」なる部分が見出されるか、明かにされて居らないのである。若しこれが明かにされた場合に於いては、恐らく吾人は夙に經濟に關する正しき見解に到達し得るであらう。此の正しき見解は經濟の本質を或る特殊の計慮に眺めることであつて、財に對する關係に眺めることではないのである。こゝに於いて、リーフマンの經濟の本質は計慮の中に見出されるものであり、この點に於いて限界利用學説が自然界に於ける物の稀少性より經濟の本質を導かんとす點に比し、大いにその趣を異にするものである。以下、これを明かにして見たいと思ふ。

既に述べたるが如くボエム・バーヴェルクは物が人の欲望に對する不可缺なる要件を以つて價值論の出發點となしたのである。リーフマンは此の限界利用論者の誤謬は經濟を一定の目的

物に關連せしめ財をその外界の定限なる存在に對し一定の關係に置く點にあるものとなしてゐる。かくして限界利用學說に於ける稀少性の概念は外界の財の稀少性を指示するものであるが、稀少なるものは外界の目的物に非ずして、これを獲得する手段、即ち勞働の苦痛である。こゝに於いてリーフマンは若し勞力が制限せられたる狀態に於いて存在しないとすれば、無限に多量の外界の目的物が獲得せられ、かくして吾人の欲望の充足は更らに一層完全を期し得るものであらう、と述べてゐる。此の勞力によりて無制限に外界が開發し得るものであるとなすは從來の物質的・數量的經濟學說の不可能が立脚してゐる一點であるが、外界財の獲得に結合する不快感、若しくは辛苦は少くとも或る一點より増加しかくしてこれが外界の財を獲得する場合に於ける究極なる費用を形づくるものである。客觀的意味に於いては極めて多量の穀物、鐵、棉花が存在してゐるのであるが、勞苦、即ち勞働に伴ふ不快感は欲望充足の享樂を遙かに超過してゐる場合があるのである。即ち、欲望充足は外的自然の目的物の定限に坐するものではなく、勞働の定限、即ち漸増する勞働苦痛に坐してゐるのである。かくしてリーフマンは限界利用學說と異なり、稀少性の概念をその究極の費用たる勞働苦痛に結び付けて定めることにその獨自の立場を示してゐるのである。ゴッセンは「人は凡ての欲望を充足するに充分なる時間を有せざるが故にその行爲を組織立てるものである」と述べてゐるのであるが、これに

對してリーフマンは定限なるものは時間ではなくして勞働力である。故に此の點に於いてゴッセンは費用要因を完全に捕捉し得ずして、從つて此の費用が得る享樂の對立の概念に到達し得なかつたのである。かくしてリーフマンの經濟の本質に關する出發點を一言にして云へば、經濟は目的物によりて決定せられるものでなく、確定の目的物、即ち制限的に存在する財に對する行爲と考へられるものでもなく、そは人間の心理に深く取入れられ、快感と不快感の對立に密着してゐるものであるとなすことが出来るのである。R. Liehmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. II. neue Lebnheite Aufl., 1-Bd. Ss. 63-70.

利用と費用の比較を以つて經濟の本質となし、又これによりて經濟と技術の限界を立てんとする見解は、更らに次の二點に於いて制約せられるものである。その一つは經濟的任務は所謂「最大限の問題」Maximumproblem であることである。利用と費用の比較が經濟の本質を形づくるものではなく、此の比較に一の觀點が附加せられなければならない。此の觀點とは所謂經濟原則に從つて利用と費用、即ち快感と不快感を比較することであり、換言すれば最少限の費用を以つて最大限の利用、若しくは快感を獲得せんとすることである。次に第二の制約をなすものは全體的欲望充足 Gesamtbedarfsbefriedigung である。ディールチェルは、經濟原則を節約の原則と見ずして一の心理的なる最大の原則と見る場合に於いても此の原則は固有の經濟行爲の範圍を脱して幾多の他の人間の行爲に適用せられるものである、と力説したのである。此の見

解に倣つて、リーフマンは更に上記の全體的欲望充足によりて經濟の本質を制約せんとしたのである。即ち、全體の欲望充足とは所謂「經濟を營むこと」Das Wirtschaften が常に多數の欲望に關連することを意味するものである。一の單獨の行爲を捕捉して經濟となすことは出來ないのであつて、これが經濟の本質を形づくるためには、常に他の多くの行爲と比較せられ、經濟的計畫の全體に關連し、その範圍に取入れられなければならない。かくしてリーフマンは、個々の孤立せる欲望を充足することが經濟的任務ではなくして、その目標は欲望全體の充足にあるものである、と述べてゐる。

此の見地より、リーフマンは既に吾々がその價值論上に於ける立場を叙説したるシェフレーを拉し來つて、その見解を正當なるものと見てゐるのである。即ち、シェフレーはリーフマンと同じく利用と費用の差額を價值論の中心となしたのであるが、更にリーフマンの上記全體的欲望充足を捕へて經濟の本質を認めんとしたのである。シェフレーは「經濟は人若しくは人の團體に對し、處分の制限せられる外界財を以つて最高利用と最少費用の方面に於いて全體の供給をなす仕組である。個々の經濟的なる營利行爲及消費行爲、營利部門及び家計の部門は、未だ經濟を形づくるものではない。」^{Schaffé, a. a. 10, S. 319.}と述べてゐるのである。リーフマンの説明する所によれば、シェフレーの上記の見解は約五十年前に於いて他の何れの論者よりも最も鋭敏に且つ

正確に經濟固有の本質を認めたものである。唯、シェフレーは此の經濟の本質を經濟學の各部門に應用しなかつたために、或は財が技術的に定義せられ、又その價值論は常套を脱すること能はずして幾多の缺點を伴つたのである。而してかく收益の概念、即ち利用餘剰の概念を認めたるシェフレーが經濟理論の一般的なる形成に對して何等の効果を齎らさなかつたことは、リーフマンによつて一の奇異とせられる所である。

此の全體的欲望充足が經濟の本質を形づくることを認めたる學者として更らにリーフマンによりオスワルトが挙げられてゐる。H. Oswald, *Vorträge über wirtschaftliche Grundlegriffe*, 1903, S. 29ff. オスワルトは「個々の場合を

それ自體に考察せずして欲望の充足に向けられる行爲の全體に連續してこれを考察すること、即ち財の單に此の利用のみではなくしてその財の他の利用、又この處分し得る財のみではなくして、他の處分し得る財を考慮すること——これが經濟性の命令である」と述べてゐる。リーフマンに従へば、オスワルトは此の正當なる見解を持してゐたに拘らず、常に一定の財の貯藏量を前提となしたるがために、彼の全考察法は從來の數量的・物質的見解に墮したのである。即ちオスワルトは第一次的の經濟的任務は數量的に定まれる財の分量を配分することではなくして、前もつて確定せざる勞働苦痛に關連してゐるものであることを認めなかつたのであり、且つ彼は又これが交換流通の基礎をなすものであることを認めなかつたのである。(以上はLichmann,

a. a. O., SS. 276—281. 參照)

かくしてリーフマンの經濟の本質は外的自然の目的物より離れて、純主觀的に導かれてゐるのである。從來の經濟學者はゴッセンを除いては悉く唯物論に囚はれてゐるのであつて、この唯物的・技術的經濟理論は日常の麴麴に對する鬭爭、若しくは食物稼の鬭爭が凡てを支配する場合に於いては恰もその外形は眞理の如く觀せられるのである。然しながら此の見解は經濟の本質を形づくるものではなく、これを演繹する場合に於いては、現在の唯物的經濟理論に到達することゝなる。かくしてリーフマンは外的自然の對象の稀少性若しくは外的手段の定限が經濟的な本質を有する行爲を導くものでないことを述べ、その理由として「外的自然の凡ての對象が無制限の分量に於いて存在する場合も、吾々は經濟を營まなければならない。何故なれば制限的に存在するものは外的の財ではなくして内的の財、即ち財を獲得しこれを享樂し得る状態に導く時間と勞働能力とである。即ち、吾々の勞働苦痛は無制限に使用し得るものではない」と述べてゐるのである。

かくしてリーフマンは勞働苦痛を以つて終局の費用となす見解に到達したのである。勞働費出の増加はこれに伴ふ不快感を増加するものである。故にこの費出は無定限なるものではなく、經濟原則に従つて行はなければならない。それは單に消費經濟若しくは家族經濟に當て

欲るのみではなく、交換流通全體にも適用せられるものである。即ち、上記不快感の増加は國民經濟全體より見るも、否、世界經濟の全面より眺むるも外的存在の財の獲得、若しくはかくして獲得したる財を享樂狀態に導くために充分であるとなすことは出来ない。こゝに於いて終局の費用にして、その存在の低減なる勞働苦痛を合目的に、即ち異なる欲望の部門に於いて最大の効果を獲得する様式に於いて配分する必要に迫られるのである。かくしてリーフマンは「財の所謂定限は自然に存するものではなく人に存在し、その定限なる勞働能力と勞働快樂に存するものである」となしてゐるのである。此の勞働苦痛なる費用要素は利用と並んで經濟の一側面をなすものであるが、絶對價值——リーフマンは價值を認めず——の獨立なる構成部分をなすものではない。リーフマンは若し上記の費用概念の主觀的考慮を認める場合に於いては、從來の經濟觀、殊に限界利用學説は排除せられるであらうと述べ、それが彼の經濟學の理論的體系が從來のそれと異なる所であるとなしてゐる。

經濟行爲の目標は快樂、即ち充足せられた欲望の最大量にある。達成せられたる欲望充足、即ち充足せられた欲望を包括するもの、従つてこれは後の營利經濟の活動に充當せられるものであるが、これをリーフマンは利用と名付けてゐるのである。此の利用なる言葉は特殊の經濟的表現として單に一欲望の充足に對する經濟行爲に連結せられて用ゐられるものではなく、

凡ての欲望の秤量に關連して用ゐられるものである。故に經濟とは利用、費用の比較であると稱する場合に於いて、その利用と費用は經濟行爲に於ける「最大限の快樂」Maximum von Genusを意味するものである。此の最大限の快樂若しくは最大限の利用は、得る利用に對して投せられる費用の割合が如何なる欲望の部門に於いても凡ての他の欲望部門に於けるよりも不利ならざる様式に於いて達成せられる場合に於いて實現せられるのである。リーフマンは此の費用に超過する利用の餘剰を收益Erlösと名附けてゐる。従つて經濟の目標たる最大利用の獲得は限界收益の均等によりて行はれるものであり、リーフマンはこれを限界收益均等の法則Gegen des Ausgleichs der Grenzerträgeと呼んでゐるのである。此の法則は單に單獨經濟の經濟行爲を規制するのみならず、交換流通の全組織を規制するものである。而してこの法則がかく廣き規制力を有するは經濟的任務の基點たる所謂最大量の問題の解決をそれ自らに包擁して居るからである。即ち、單獨經濟に於いても國民經濟に於いても最後に支出せられる費用單位を以つてする利用と費用の割合、即ち限界收益が凡ての欲望に於いて均等なる大いさとなる限度に於いてのみ、費用は個々の欲望充足に投せられるものである。これによりて初めて經濟の目標たる最大利用、即ち最大の欲望充足が達成せられることになるのである。(以上はLiebmann, a. a. O., SS. 286—9を參照)

最後にリーフマンの經濟の本質に關して吾人の注目しなければならないことは、それが心理

的基礎に立つ一の「比例の組立」Proportionalitätssystemである。之である、利用と費用の比較は重量、若しくは長さの比較と異なつて比較の測度 Vergleichungsmassstab, tertium comparationis を保有して居らないのである。經濟を純心理的基礎に基づいて利用と費用の比較にその本質を有つものであると見る限り、それは數量的測定——これは營利經濟に於いてはその特質たる貨幣計算によつて實現せられるのであるが——ではなく、純粹なる感覺的比較である。即ち、各個の追求せられる利用は先づ不快感としこれが除去のため所要せられる等しく不快感と吾人の意識の内面に於いて比較せられるのである。これ等の快感は凡ての欲望に就いて相互に比較せられ、吾人は意識の内面に於いてこれ等の感覺を、その強度に應じて配列することが出来るのである。

従つて二つの不快感、即ち充される不快感とそれを充すための不快感の開きが、他の同様の不快感と比較して例へば大であり、又は小であることは嚴密に知覺し得る所である。こゝに於いて經濟は二重の比較を意味するものである。その一つは各個の欲望をその費用と比較することであり、次は凡ての欲望に就いて費用の支出が達成する餘剰を比較することである。故に經濟行為の決定は餘剰、即ち二つの不快感の開きの純心理的なる感覺の大いさによりて企てられるものである。この感覺の比較に對しては比較用具を必要としないのである。故にリーフマンは「純心理的に捕捉せられる費用に對する利用の超過は各欲望に費出せられる費用の測度を決定する

ものである」となして、從來の價值論が貨幣によりて利用を測定せんとしたる立場に反對して居るのである。利用と費用の比較、即ち經濟的計慮に對して比較用具を必要とせざることは經濟の本質的標識が費用を異なる多くの欲望に配分することを意味し、費用そのものを單位として考察する見解を導くものである。即ち、この單位として考察せられる費用は費用の言はゞ公分母であつて、それ自體が心理的のものであり、從つて個人的に評價せられるものである。經濟者は終局に於いて勞働苦痛を以つて計慮し、これを多種の欲望に配分するものである。然しながら屢々貨幣所得、即ち費用の秤量が經濟者の目的となるのである。貨幣は利用と費用の比較の *Tertium Comparationis* ではなくして、經濟の單位をなす費用要素、若しくは費用の公分母、若しくは單に費用單位を形づくるものであつて、各經濟者により、その所得の額に從つて費用として秤量せられるものである。貨幣を費用として各個の欲望に對し秤量せられる度合は甚しく異なるものであつて、從つて此の場合に於いても、恰も勞働苦痛が費用をなす場合と同じく欲望充足に對し獲得せられる利用と支出せられる費用が比較せられ、それは全く心理的のものである。かくして各種の欲望に就いて利用と費用の餘剩、即ち開きが相互に比較されるのである。こゝに於いて合理原則に立脚する經濟は一種の「比例の仕組」となるのであるが、それは數量に於ける比例ではなくして、心理的基礎に基づく比例である。かくの如き心理的考慮を以つてす

る場合に於いて初めて、即ち目的とそれに到達する手段が豫定せられず、この目的の達成と手段の費出の範圍が初めて凡ての手段の比較によりて行はれる場合に於ける行爲を決定するために、經濟の根柢をなすべき典型的動態問題が解決せられることとなるのである。リーフマンはかくして心理的目的と手段の比較が、その比較の用具を必要とせざればこそ、上記のことが可能となるのであると述べて居るのである。而して一定の目的と手段を豫定せずして、經濟の根柢たる典型的なる動態問題が解決せられるものであると見てゐる點は、從來の限界利用學說が一定の財の貯藏量を豫定し且つ利用に對する費用の比較なく、從つて收益、即ち心理的餘剩の概念を導かずして、經濟の本質を捕捉せんとする見解に比較し全く反對の立場を取るものである。故にリーフマンの限界利用學說に對する批評を次に述べて見たいと思ふのである。

先づ限界利用學說は一定量の享樂財より出發し、從つて何程の財が果して獲得せられるかの問題は何處に關連するものであるかの固有の經濟的任務を等閑に附してゐるのである。然るに享樂財の分量とその最後の一單位を形づくるものは果して何れであるかは、此の限界利用學說の前提の如く豫定せられてゐるものではない。即ち、この財の何程が獲得せられ若しくは生産せられるかは主觀的な利用と費用の比較に基づいて行はれる經濟的任務の達成せられた後に於いて初めて決定せられるものである。此の享樂財の量を豫定して財の價値の測度を見出さん

とする努力は、恰も古典經濟學の努力が公正價格に仕向けられたるが如く一の誤謬である。リーフマンはその經濟の本質を形づくる利用と費用の比較が財の量を豫定せざることを持して限界利用學說に反對の立場を示してゐるのであるが、此のリーフマンの見解自體に對してアモンは「彼—リーフマン—もその秤量の理論に就いて到底、所與の分量を無視することは出来ない。秤量の基礎を失ふことがなければこれを無視し得ないからである」^{A. Amon, Liefmans neuwirtschaftslehre, Arch. f. Soz. Wiss., Bd. 46, 1919, S. 412.}と辯駁してゐる。リーフマンは此のアモンの批評に對してそは欲望を離れて財の分量より出發したる典型的なる唯物見解であり、此の見解は彼の見解より極めて大なる隔りを有つものであるとなしてゐる。即ち、リーフマンは此の場合に於いて單に欲望の強さの低減、享樂若しくは利用の低減の概念を得るためには、敢へて財の豫定量を必要としないのであることは勿論、上記欲望の強度、享樂若しくは利用の低減に對し勞働苦痛の費出に伴ふ不快感の増加の概念を對立せしめる場合に於いては益、財の豫定を必要とせざることが明白となるのであると辯じてゐる。これ經濟現象が説明せられる根據たる經濟的計慮の立脚點であり、經濟現象は財の價值の決定に依存してゐるものではない。リーフマンの限界利用學說に對する第二の批評は、この學說が限界利用を以つて財の價值を決定せんとする點に向けられてゐるのであつて、之れは風にレキシスによつて批評せられた所である。Lexis, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, S. 29, 限

界利用學説は一定量の財の一箇片を捕へて、その最後の箇片が何程の價值を有つものであるかを述べてゐるのに過ぎない。而して此の最後の箇片の價值を以つて財の全量の價值を決定することは不可能である。又屢、限界利用論に關し單に限界利用に凡ての箇片の數を乗することにによりて全量の價值は得られるものに非ざることが立證せられてゐるのである。若し假にかくすることによりてこの全量の價值を得られるものとなすも、果してこの全價值概念が經濟者に對して如何なる効果を有つものであるかは一の疑問であつて、それは單に十個の林檎を有する場合には百個を有する場合に比して一個に對しより高き秤量をなすことを意味してゐるに外ならぬ。然しこの立證によりて何が明かにせられ、又限界利用學説は此の立證によりて果して何を説明し得たであらうか。これ此の學説の重要性の決せられる點である、とリーフマンは述べてゐるのである。かくしてリーフマンは限界利用學説は從來經濟現象の説明に何程も寄與せず、又吾人はこの學説によりて何ものも明かにし得ざるものとなしてゐるのである。此の限界利用學説の無能を從來吾人の知覺せざりしは特に注目すべき點であり、而してかくなりたる理由は、價值概念を財の理論に對する固執によりて明かにせんとする點にあるとなして、リーフマンは此の第二の非難の根據を限界利用學説の唯物的基礎に探つてゐるのである。更らに限界利用學説に對するリーフマンの批評の第三點は、この學説が全く心理的なる費用概念を等閑に附した

ることである。限界利用學說に基づく價值の決定に就きリーフマンは「費用概念の諸要素と利用秤量の混合體であり、その兩者の誤れる綜合であり、従つて此の場合に於いては一般に費用と利用の對立を原則として理解することが缺けてゐるのである」と述べてゐる。之れ限界利用學說に於いては快樂を達成する費用に當り一定量の財が費用として前提せられてゐる譯である。若し享樂財が費用として支出せられる場合に於いては——これは極めて大なる實際的意義を有つものであるが從來の經濟理論に於いては未だ分明せられてゐない——各單位は費用として異りたる秤量を與へられるものである。殊に、此の秤量は此の單位の費出によりて失はれる利用によりて行はれるものである。こゝにリーフマンは費用の概念を主觀化し、限界利用學說に於いては、此の概念が缺如せることを非難してゐるのである。而してこの見地より彼は限界利用學說が經濟の本質たる利用に對立する費用を認めず、従つて利用と費用の比較を分明ならしめなかつたことを非難してゐるのである。(以上 Liefmann, a. a. O. SS. 647—58 參照)

以上は限界利用學說に對するリーフマンの批評の三點である。而して從來の經濟理論が費用なる概念をリーフマンの言葉を借りて云へば物質的・數量的に解してそれを主觀的な利用に對立せしめなかつたことは著しき缺點であり、この點に於けるリーフマンの純心理的基礎に立脚する利用と費用の比較は、價值論上に於ける一の卓見と言はなければならない。加之、リー

フマンが經濟の本質を最大限の原則 *Maximumprinzip* に求むる場合に於いて、自から費用に對する利用の超過量、即ち餘剩若しくは收益の概念に想到し、此の收益が各欲望の部門に於いて均等する點に經濟の目標を認めたる點も、正しい見解と言はなければならないのである。特に現在貨幣經濟を前提とする消費經濟に於いては、費用の支出は貨幣所得の配分の形を取つて現はれ、従つてこの所得の配分の可能の範圍は擴大すると同時にこれが配分せられる欲望部門の順位も明瞭に確定化するものであり、従つてこの所得により獲得せられる利用とこの利用を獲得するために當然費出せられる利用、即ち費用も明確に認められる傾向は漸次高まり來つたのである。この場合に於いて、リーフマンの利用と費用の比較の經濟の本質に關する見解は、明かに從來の經濟理論に比してその一步を進めたものと言はなければならない。尤もこのリーフマンの見解に對し吾々は所謂利用、費用の合一化の見地より次の批評を加ふることが出来る。先づリーフマンが純主觀の見地より發して、利用と費用の比較により *Proportionalitätsprinzip* を固持することは、必ずしも價值 *Wert* なる概念を除外する論理を導くものではない。吾人が一定の所得を以つて經濟——消費經濟——を營む場合に於いては、この經濟がリーフマンの最大限の原則に導かれ、利用と費用の比較によりて達成せられるものであり、従つてこれに對しては比較の用具を必要とせざるものとなすも、此の經濟の結果として購買せられ得る財の一定量が欲望の

各部門——この所得を以つて充足せられる欲望の部門——に於いて確定するものである。勿論、リーフマンの主張するが如く吾人は豫定せられたる財の分量に基づいて經濟するものではなく、經濟の結果この財の分量が確定するものに外ならない。一定量の財を前提することは、リーフマンの批評の如く明かに限界利用學說の一の難點である。然しながら經濟の結果はこれと同時に獲得せられる財の分量が定まり、此の財の分量が各欲望部門に於いて定まる點は、リーフマンの消費經濟に於ける限界收益の成立する點となる。限界收益は各欲望の部門に支出せられる費用の測度 *Mass* を決定するものである。^{Liebmnn, a. O., S. 285.} 而して各費用單位は費用として各異なる評量を受け、この評量はその單位の失へる利用に従つて企てられるものである。^{Liebmnn, Ebenda, S. 654.} 故にこの失はれる利用、即ち費用によりて獲得せられる利用を決定するものは、リーフマンに於いては限界收益である。限界收益は利用が費用に超過する部分であり、これは當然獲得せられる利用の中に包含せられてゐるものである。而してリーフマンの見解に於いても、一定の費用を投じて獲得せられる利用は一定の所得の下に於いては經濟の結果、常に確定するものである。即ち、リーフマンの所謂限界收益均等の法則は最終の費用單位によりて獲得せられる利用の大きさを決定せんとするものであつて、この決定せられる利用の大きさが一欲望部門に於いて投せられる費用の單位數を決定し、從て財の分量をも確定する意味に於いて之に價值 *Wert* なる名稱を

附する。ことは、リーフマンに於いても拒否せられない。此の價值は必ずしも一定量の財を豫定して唯物的・技術的に導かれたものではなく、經濟を前提として定まりたる財の分量に附加せられる一の數量的秤量である。かく考案する場合に於いてリーフマンの利用と費用の比較は必ずしも限界利用學說を隔たること遠からざることにと想到するのである。唯、リーフマンが財の定量を豫定せず *Proportionalitätsprinzip* により利用に費用を對立せしめたるは限界利用學說に於ける經濟の本質に一步を進めたるものなるも、それは別個の理論を樹立したのではなく、これを一層明確ならしむるに貢獻したるものに過ぎないのである。アモンとエスラムが上記リーフマンの見解を批評して、その見解は限界利用學說の中に、既に包含せられるものとなし、或は此の學說が必ずしも獨創に非ずとなすのであるが、少くともリーフマンの見解は限界利用學說の主觀的立場を益々徹底せしめたる意味に於いてのみ大なる意義を保つものである。

以上、吾々は價值論上に於ける幾多の學說を検討し、この學說に含まれる立場を仔細に吟味したのである。而して通常二面的價值理論の代表者として知られるシェフラーの利用と費用の差額に於いても、又デーリチェルの利用と費用の相互的決定の立場に於いても、明かに利用と費用の合一化が價值を決定するとなす根本見解の包含せられることを考證したのである。特に價值無用

論者としてのリーフマンに於いては彼が價值なる言葉を斥けて居るに拘らず、利用と費用の比較を力説する立場には明かに利用と費用の合一化の根本見解が含まれてゐるのである。即ち、此の兩者が合一する點は現實なる財の分量が確定せられることを示すものである。かくして財の定量は經濟の結果實現せられるものである。而して利用と費用の合一化は一主體の内面に於いて經濟性の活動の目的とその範圍を區劃するものである。従つてこれにより財の分量が確定したる場合に於いては、合一化の一點に於いて價值がこの定量の財に附加せられることとなるのである。即ち、かくして利用と費用の合一の結果、生ずる價值は獲得せられる財に對して幾何の費用——多くは貨幣所得——が支出せられるかを決定するものである。かくて一主體の内面に於ける利用と費用の結果は兩者の合一點に成立する價值として流通經濟社會に於いて實現せられる。この利用と費用の合一化による價值の成立は、從來の限界利用學說に於いては費用なる概念の缺如せしために現實なる經濟生活——價格生活——に結び付けて認められなかつたのである。而して私見によれば此の學說の唯一の難點はこゝに存するが如くである。故に、吾々は從來の限界利用論を費用概念によりて補足し、この學說の現實なる運用は、價格生活の前提に於いて成立する費用概念に連結せられて初めて達成せられるものであることを認めるに難くない。かくて價值現象の本體は利用と費用の合一化によつて實現せられるのであり、これが吾々の取るべき價值論上の立場である。(一九二八・一〇・一)